第四回 文芸思潮新人賞発表

文芸思潮新人賞

第四回文芸思潮新人賞に御応募くださいまして、まことにありがとうございました。今回は前回より微減の三八篇の応募数でしたが、少数精鋭と言うべく優れた作品が集まり、発想の鋭さ、また新しい視点や構想による作品が多数見られ、新人にふさわしい世界を開いてくれました。卓越した文章が目立ち、新世代の言語力を示していました。

九月末に予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な選考審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

誌面の都合により、今号は当選、優秀賞作品三篇だけを掲載させていただき、また次号以降に順次掲載の予定です。

授賞式・祝賀会は、申し訳ございませんが、考慮中です。佳作以下の賞状・賞品は後日直接御本人宛てに送らせていただきますので、よろしく御了承ください。

なお文芸思潮新人賞は明年も枚数、締切、審査料などほぼ同じ要領にて募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちして申し上げます。

最優秀賞

「顔」

蒼木　緑

（岩手県紫波郡）

優秀賞

「今日は生きます、でも明日は死にます」

加藤　拓

（東京都文京区）

「ホワイト・ライ」

小幡洸貴

（富山県富山市）

奨励賞

「匿名記者アカウント」

萌乃ポトス

（群馬県桐生市）

「幽隠の終わり」

中山喬章

（京都府京都市）

「圭と凛」

河埜喜一

（広島県呉市）

佳作

「ある現実――散文詩風な小説」　成瀬十八

「自然発火」　小山鬼

「黙れ」　南﨑理沙

「Duplicate」　さんし

「なくのは女のないものねだり」　藤本亜香莉

「手紙屋」　大吹紫音

「不可逆的後悔史」　宇部道路

「蟷螂」　似内

入選

「閃光」　鈴木希寿

「瑠々々」　米井暢成

選評

新しい発想や最近の素材

大高雅博

今回は、新しい発想や最近の素材を使っての小説が多く、それは良いのだけれど、残念ながら完成されるまでにはなっていないものも多かった。

ただ、飛び抜けた作品が二作品あり、当選作が今回出るかどうかが、僕の事前の興味だった。

当選作蒼木緑氏の「顔」は、面白い。相手の顔を見ると相手の死に顔が見えるという能力があり、伏し目で生活している。その時、彼女が現れ、顔を見ると綺麗だった。彼女は相貌失認であり、顔を顔と認識できない。ひょっとすれば、そのために、このまま、付き合えるのではないかと考える。主人公が、その人の目を見ると、死相が見える、という発想が良い。それに加えて相貌失認の彼女を出してきた発想が良い。この二つを発想できたことで、この作品は成功した。第一回の新人賞の三作の質が非常に高く、中々受賞作が出なかったのだが、漸く新人賞が出たことは喜ばしい。物語としてもとてもよい。

優秀作加藤拓氏「今日は生きます、でも明日は死にます」はとても切実な話だ。不妊治療を続けてやっと、産まれた赤ん坊がＮＩＣＵ（新生児特定集中治療室）で幾本ものチューブにつながれベッドに横たわる。医者からは「回復の見込みがない」と言われ、中々妻に告げられない。切実な話である。赤ん坊はチューブを取り外され、亡くなるだろう。その前に妻は赤ん坊の指に触れ、温かみを感じる。惜しむらくは、あまりに枚数が少ない。だが、とても良い小説であることには間違いない。

僕の三番手は奨励賞中山喬章氏「幽穏の終わり」である。この小説の方向性は良いと思う。ただ、「パティローマ」や「新屋敷さん」についての、解答というか、どちらかでもいいので、何か、実在を最後に示せば良かったと思う。伝奇小説の方だと思うが、例えば、半村良や、昔だが、小栗虫太郎が書く小説を思い出す。小栗虫太郎は、法水麟太郎という探偵が活躍するペダンチックな「黒死館殺人事件」が有名だが、「人外魔境」「有尾人」などの伝奇小説も書いている。その辺から刺激を受けて欲しい。

奨励賞萌乃ポトス氏「匿名記者アカウント」は現代でしか書きえない作品で、新聞社の裏側を書くには良い手段だと思う。最後に向けて、もう少し、やりようがあったのではないかなとは思う。

さて、優秀賞の小幡洸貴氏の「ホワイト・ライ」であるが、富山を舞台にして、雰囲気もあるのだが、できるだけＳＦ臭さを減らして、ファンタジーに徹した方が良かったような気がする。ＳＦ小説として見ると、やや雑で、浅いのではないかと思う。隕石型宇宙船から現れた遺骸は「古く三万年前程のヨーロッパ系の遺伝子を最後に」とあり、この宇宙人は三万年前に地球に来てかなりの人類を宇宙に運んだようであるが、まず、彼らは何故、この広大な宇宙の中で地球に来たのか地球を選んだのかが、分からない。何のために人を自分たちのところに運ぶ必要があったのかが分からない。

そして、何故、遺伝子変異を繰り返して、三万年もその人達を育てのかも分からない。おそらく、地球と違う重力下では、子孫を産み育てるのは難しいと思われる。重力を操れるとしても人が生きるためにはかなりの環境を用意しなくてはならない。それも三万年もだ。合理的な理由がないと、無理だ。それから、簡単に三万年前のヨーロッパ系の遺伝子と言っているが、そこはもっと丹念に調べれば、色々材料が広がったと思う。どうも、三万年前のヨーロッパには、まだ、ネアンデルタール人がホモサピエンスと共存していた可能性がある。ネアンデルタール人はホモサピエンスよりも体が大きく、頭脳も変わらず、道具も使い、独力で獲物を仕留められたという。ホモサピエンスはその力がないので、集団で獲物を取った。歴史的に見ると力が強いものが生き残るわけではない。生き残りには、かなり偶然が関わっている。日本人のＤＮＡの中にも２％と少ないが、ネアンデルタール人の遺伝子が入っているという。（ネアンデルタール人の遺伝子が入っていないのは、サハラ砂漠以南の人々だけという。）この小説では宇宙人が住む惑星は「生命に適した環境が一千年にも満たない」とあるが、地球で生命が誕生したのは、地球が生まれてから一〇億年以上であり、流石にその仮定は無理があるのではないか。また、二十年前に地球に来て、二十年後にまた来るというのも、無理があるように思える。

それらを満足させるとすれば、例えば非常に科学的に進み、重力を操ることができ、文明も発達したので、隕石型の宇宙船で、他の星の知的生命体を探すことにした。しかし、ほとんどが無生物の星ばかりで、あっても下等な植物がいるだけの星だった。その時、初めて知性的な生き物がいる星が地球だった。三万年前の地球に来た彼らは生命の研究を兼ねて、動植物を冷凍冬眠させ、巨大な箱型の宇宙

船（後のノアの方舟伝説となる）で彼らの住む惑星の近くの星で、重力を作用させ、それらが住める環境にして、彼らの進化を見守った。その中にネアンデルタール人や、ホモサピエンスも含まれていた。三万年の間彼らは進化し、繁栄し始めた。だが、そのエリアは手狭になり、一部を地球に戻そうとした。月の裏側に宇宙人の前線基地があり長年地球を観察していた。彼女を地球に送り、二〇年間様子を見た。そして、彼女を回収する。大雑把なものだけど、色々考えられるだろう。

隕石型の宇宙船が出てくるけど、ジャック・フィニイの「盗まれた町」では、そら豆かそんな形の宇宙船で地球に侵略に来る。全く科学的ではないが、この作品は大傑作で、全く違和感はない。確認して欲しい。アーサーＣクラーク、ハインライン、ヴォークト、アシモフ、山田正紀と、いくらでもＳＦ作家はいる。図書館に行けば、まだ置いてあるのではないかと思う。色々読んでほしい。

最後に、昔、地球から宇宙に向けて規則的な電波を発信し、地球に高度な生命体があると知らせたが、宇宙からは、これまで一度も高度な生命体からと思われる電波を受信していない。これはおかしい、とされているが、なぜ受信できないかは謎とされている。その一つの回答が、近年、最高のＳＦ小説であろう劉慈欣（りゅうじきん）の「三体」にある。非常に文明と科学の発達した惑星に住む人々は、自分たちがそこに住んでいることを秘密にしてじっとしている。何故なら、他の惑星に住む文明人に知れれば、どの程度の科学力を持っているかも分からないために、自国を守るために、すぐに攻撃され自分たちを滅ぼすだろうと思われるからだ。勿論、彼らが別の惑星に知性のある生物がいるとわかった時点で自分たちの脅威になる恐れがあり、彼らを殲滅するだろう。だから宇宙は沈黙を守っている。小説では「黒暗森林」と呼んでいる。

皆さん、先は長いし、世界は広い。考えること、想像力も限りがない。頑張ってください。

展開の充実に欠ける

八覚正大

第四回目になるこの賞、今回も感覚の鋭さや、設定のおもしろい作品はあったが、どこか二者関係の狭い世界のやり取りに終始したり、一人の独白的思弁の開陳だったり……で、展開の充実に欠けている気がした……。全体を通して言えば、ライトノベル的な感覚を越えて、若いなりに作者が出逢った人生の「事件」への〈格闘のような関り〉を読みたかった（それを感じたのは一作のみ）。次回をさらに期待したい。

「顔」東北の片田舎の、それでも進学校に在籍する主人公。頭はいいようで、担任から「東大も目指せるんじゃないか」といわれ、特に気が入るわけでもなく、〈たぶんこのまま、周囲の言われるまま動くのだと思うし、実際動けるのだと思う。自発的に何かをしようということもなく、人間のあたりまえと僕のできることを律義に拾い集めていくうちに僕は大人になっていく。年をとっていく。命を使い、老いていく。〉という自意識。でも潜在的感性は鋭いちょっと内省的な高校生。で予備校にも通わず、図書委員になり、あまり人の来ない図書館を勉強の場にしている。はじめはそのような青年の内面が描かれるのかと思った。しかしそれだけではなく、母親と目を合わせられないという設定、そして主人公は〈目を合わせた相手の死相を見てしまう〉と。

そんな主人公が、美しく活発な女子生徒と鉢合わせをし転倒した所から、彼女との関りが始まっていく。その描写はなかなかだ。〈また、目を合わせてしまった。……僕の目から血に通じ、肌を透かして内臓の奥の奥まで、そして細胞の一つ一つに至るまで、大地の下を流れる赤黒いマグマのようにじりじりとゆっくり、しかし確実に僕の全てを焦がさんとするような熱い眼差しだった〉と。そこから主人公と彼女との流暢な対話が展開される。結果として、〈清水さん（彼女の名前）の視点を通して僕も少しずつ今にピントが合うようになった〉と。この世に生み出されたにも拘らず、自分の心を生み出せていない内面の自閉性が解かれようとする……その描写もなかなかいい……しかし、彼女は突然トラックに轢かれて亡くなってしまう。感性の鋭さ、描写の良さ、にも拘らず、狭い二者関係の中で、目の合った人間は死ぬ――という主人公の閉じた固定観念的自意識の世界に落ち込み直す（予想された）ラストは……詰まらなかった。

「ホワイト・ライ」〈妻は嘘を愛する人だった。妻は美しい人だった〉と始まる出だし。さらに〈西洋の血、金髪青眼。キメ細かな白肌。濃い眉は筆先のよう。高い鼻。ハート型の唇……ぷっくりした唇、嘘つく舌先は魔法の杖〉と続く。ところが障害のある子が産まれそうになり中絶、と共に離婚になる。……この展開はなんだろう、ちょっとハチャメチャな感じ。そしてどんなシチュエーション？　と知りたくなる読者を前に、〈――妻は一体何者なのか。これが僕の知りたかった真相だった〉と突き放す。

一方、主人公が学生だった富山大学というのが、実名で不思議なリアリティを感じさせ、そこから話はSFの世界に入って行く。妻の父親は天文学の教授だったという設定。更にその中谷教授の論文には、飛来した隕石から、地球人類以外の知的生命体が確認されたとあった。それからどんどん話は飛躍し、ついに妻は（かぐや姫のように）宇宙船で帰っていく……そこに主人公は乗り込んで再会する。で結局主人公は重傷を負いつつ地球に帰還する。

敢えて言えばまさに荒唐無稽な小説、しかしそれを受け容れて読み進めると、不思議な詩的世界の感覚が湧いて来る。……希望は前向きの嘘と言った妻の言葉や、太古の宇宙人類が詠んだ詩の中の〈言葉は記号が造る嘘〉とか、扉とラストにある二行詩にも、何か惹かれる。〈F was a hook, originally〉Fとはフィクションの頭文字だろうか、そして〈人生は嘘の中のフック〉という言葉。まだ未知数の部分を多く感じさせるが、小説というものへのある種挑戦的な姿勢は可能性を伝えてくる。

「今日は生きます、でも明日は死にます」〈数多の管につながり、真っ白い布に包まれ、縮こまるような姿で横たわる赤子を、彼は見ていた〉と始まる。そして〈白衣を着た人間が、隣で何か言葉を発している。けれども、彼はただその赤子に繋がれた管の本数を丁寧に数えることにのみ集中していた。……もう少しで十本になる。その最後の一本を何としても見つけようと、……ずっと探していた〉。ここはなかなか臨場感があり、良い出だしと感じられる。十本が数が多いかはさておき、異様な管の繋がりと解すればよく、その入り組み交ざりなどを描いたら、更に文学としての導入になったかと。生死の境をさまよう、赤子は、NICU（新生児集中治療室）にいるのだった。

その生死に翻弄される主人公の気持ちが実によく描かれている、それも客観性を差し入れて。妻への告知、その母親との対応、家族というものへの過去の考察、そして関わるナースとの距離……実際に経験しなければ分からないような、この見事な目があるからこそ、人間の死は支えられるのだと感じさせられる。

ラスト、〈看護師は助けを求めるように、今度は彼を見つめた。しかし、彼は決してその眼を見返さなかった。妻と同じように目の前の子どもをただ見つめていた。一瞬も目を離さずに、苦しんでいるその子を、その苦しみを一瞬たりとも見逃さないように。……突然、彼の妻はそっと指でその子の顔に触れた。赤黒く紅潮し、眼は拓かれず、痛める、悩ましい偉大な顔に。そして、顔を優しくゆっくりとなぞり、その後、赤子の手にも触れた。赤子の手はそれを静かに握ろうとしたように見え、妻は、今日初めて彼を

見て、驚いたような顔をし、それから静かに笑った。彼は、その二つの指を、恐る恐るそっと包むように、触った。暖かかった。その暖かさが、掌の中にゆっくりと、でも確かに、広がって行った。〉新しい家族の、最初で最後のコミュニケーションが成り立った瞬間、それが大きな感動と共に伝わってきた。ただ、枚数も含めて、命への考察がさらにあればと思われた。

「匿名記者アカウント」　大変な労働環境の中で、精神を病んだ記者が、思い付いた奇策、匿名記者のアカウント。そのことは良く描かれ、発想も面白く現代的だ。〈誰かとして、SNSの名が生きる。……いわば暗闇のトンネルで見えたそれは一筋の光だった。最初は支局の誰かになりきっていたが、次第に脚色され、誇張され、自分が成りたかった理想の像をアカウントに反映して行った。いつしか、支局の誰でもない別人へアカウントは変質していった〉と説かれている。ただ、その世界の空中の闘いはあるとしても、やはりリアルな人格を持つ人間同士の関りの重さが文学のテーマであり、ヴァーチャルな世界は感動を齎しては来ない感がある。かつて多重人格ものが流行ったこともあるが、どんどん人格が増えても（病名のインフレのよう）、だから何……という感じで消えて行った気もする。主体性は人格の統合にあり、命のダイナミクスもその躍動にある気がする。

「圭と凛」感覚は鋭く、孤独ゆえに繋がりの強くなった、男女の中学生。哲学的心理学的な内容も入り、考察も中学生にしては中々と思われ、この世で初めて「他者」に触れ得た感覚は描けている、でも人間は〈その先〉に広い世界が展開していくわけで……文学としては世界が狭すぎる感がある。

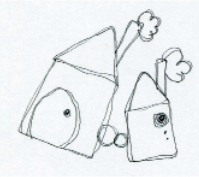
出て来るオールドワイズマン（老賢者）のような校長も、現実にはいない気がする。当選作の男女の出逢いと、この小説もどこか近い。〈凛だけは。彼女だけは――その瞬間。そこまで考えて。僕は、気が付いた。自分に雷が落ちたような気分だ。見える景色が、変わった気がする。……だから、そのことが正しいのか確かめたくて、この動悸の正体をもっと知りたくて……〉などという描写は初々しく伝わっては来るが。

「幽隠の終わり」　証券会社に勤めていた主人公が、都会を脱しての八重山紀行、そこでの体験。そして自ら民宿業を始めるに至るまで。いろいろ描かれてはいるが、いま一つドラマが感じられない。ラストの〈やはり、人を変える存在は、外からやって来るものだと僕は確信した。しかも、それがいつやって来るかは誰にも分からない〉というのはそうだと思われるし、新屋敷も、阿頼耶識を連想させ

るが……もっと体験から得たオリジナルな考察を読みたい気がした。

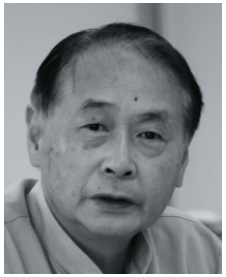
「Ｄｕｐｌｉｃａｔｅ」交通事故で亡くなった妻の複製との対話の日々、少し冗長な感はあったが、それなりに読ませた。人間の脳は、心は、それが複製だと分かった後も、日常を生きていくためにそんなツールを生み出し支えにしていくかもれない。人間が生み出したペット、補助具、薬……写真、映像、アート……代償行為とはそれだったのではないか。〈人生は嘘の中のフック〉という優秀作「ホワイト・ライ」の二行詩がなぜか浮かんできた。

「蟷螂」幻想的な男女の関係、描写が幻想絵画的、〈……でも私、急にムズムズしちゃって、なんだかどうしても仁科先生が食べたくて仕方がなくて、行為中なのに、変だったのよ私、本当に本当に抑えきれなくて、そうしたら驚くくらい大きな口が開いたのーそれでね、彼の頭を丸呑みしちゃった〉　メスの蟷螂語を翻訳した感覚か。



新人らしい発想と挑戦

五十嵐　勉



文芸思潮新人賞もこれで四回目だが、一回目は三人が最優秀賞に当選したものの、二度続けて最優秀賞が出なかったので、今回は出て欲しいという願望があった。それに応えるように、一つ傑出した作品があったのは、喜ばしいことだった。

蒼木緑氏の「顔」は、相手の顔に未来の死相を見てしまう奇妙な能力をめぐっての、青春風景のドラマである。若さに溢れる人生のスタート時、人の晩年の顔や人生の結末の姿をある種の畏怖とともに想像することは、人生全体への意味を問う思考として抱くのは自然だが、それを「メドゥーサの眼差し」として先鋭化させた着想は、作家の資質を感じさせる。カタストローフへと上昇させて、切り落とす最後への収斂性へ結晶させるその技術はまだ発展途上にあり、削るなどかなり手を加えてもらったが、文の運び、会話の流れとテンポなど、快感を醸すものであり、天性の弾みを備えている。無論、これは高校生という舞台でこそ

可能な会話で、快さではあるが、優れた音楽に乗っていくような快適さがある。これがあるからこそ、最後の悲劇が「切り落とし」の効果として胸に深く刺さる。この美質を大事にして、社会の中でも流れる会話空間に、人間の問題、命の問題を捉え凝結していくと、真の作家になれるだろう。目標を持つということは、生きがいに繋がる。

小幡洸貴氏の「ホワイト・ライ」は、空想や想像を紡ぐ展開力がある。縮こまりがちな日常のリアリズムを非日常の翔りへ大きく羽ばたかせていく広がりが、筆者の創造力というべきだろう。「嘘」を起点としながら、日常をグングン破っていくストーリー展開は、自由に大きく広がっていく。その飛躍力に活気がある。日本の狭い生活空間や組織に束縛されないこうした自由な羽ばたきを、自身の個性と思って、大切にしてもらいたい。こういう力が日本の沈鬱な停滞性を打ち破って広がっていき、何かの可能性を生んでいくはずで、小説などのフィクションがまずその力を発揮しないと、未来への企投にならない。大いに期待できる才能と思う。当初、私はこの作品も当選でもいいと思っていたが、選考委員の一人がＳＦ小説を好きで、この分野の作品をたくさん読んでいることから、ＳＦ小説としての不備をうるさく突いてきたので、この作品では強く推すことを断念した。私自身は、これをあえてＳＦ小説と見なくてもいいのではないかと考えたが、もう一作見るのもいいかもしれないと妥協した。ただ、この小説は、前半の「嘘」を基調にした部分と、後半の宇宙人の部分とが、整合していない恨みがある。「嘘」が宇宙人までテーマとしてカバーできるか、という疑問が残る。これらを踏まえて、またぜひこの新人賞に挑戦してもらいたい。

もう一篇の優秀賞、加藤拓氏の「今日は生きます、でも明日は死にます」はその切実さが強烈である。誕生したばかりの我が子の生死を突き付けられて、命とは何か、生きるとは何か、容赦なく迫られる。この緊迫した状況によって、根源から命への問いを突きつけられるところに、このドキュメントの迫力がある。命の尊厳を、誕生の決定的時期に限って、微分拡大のような方法で、深さを呈示する、問題作である。今、この瞬間も世界のどこかで生まれている命に対して、普遍的な状況を突き付け、無数に溢れる地球上の命が、そうした決定的な分かれ目の上に成り立っている稀有な状況の底部を思い知らせてくれる視点は貴重である。もしこれがもう少し長く、命への洞察と普遍へと広がる哲学が添えられていたら、当然当選になったと思われる。多くの人に読んでほしい作品である。

奨励賞は新人らしい斬新な分野が目を引いた。「匿名記者アカウント」（萌乃ポトス）は複数のツイッター・アカ

ウントを持つ錯綜した現代の個人表現模様をうまく描き用いて、そこに浮き彫りになる組織の下の人間意識を浮き彫りにしている。新聞社という特にスピードと行動力が要求される世界で、社会表現組織によって圧迫される個人の内面の歪みと苦悩を、匿名や偽名で発散する心理運動が、ここにはよく描き出されていて、この面からも活字メディアの行き詰まりの一端が垣間見える。小説作品としての問題の摘出としては、圧迫され潰される個人の内面に留まることなく、逆にＳＮＳによる取材や情報源の広がりにまで目を向けて、その可能性や新しい問題も加味して欲しかった。このままでは潰される歪みだけがクローズアップされて、結局組織への反発にしかならない。よく考察すれば、もっと恐ろしい可能性も現れてきそうである。

「圭と凛」（河埜喜一）はデュエット形式による小説で、互いのモノローグがいい協和音を奏でていて、流れは淀みない。それぞれ孤独や自閉的な世界を抱えた者同士の交感は、男女の融け合いを深めながら、恋愛と支え合いの底に眠る未来への道を確かめていく。その考察に、快い律動があり、純粋さを磨きつつ、螺旋を孤独の世界に巡らせて沈めていく。これはこれで完結し、結びは得ていて、一九才という年齢を考慮すれば、恋愛を通したその思索力は評価すべきだが、一抹の不安は残る。社会はもっと裏切りや打算の泥沼で、この二人がそれらの汚穢からいかに純粋さを保てるか、やがて試練に立たされるのではないか、という危惧である。それは社会という外部だけでなく、自分というものの中にも潜んでいる、変化の魔物で、これらを経たのちに到達する真の輝きを、また期待したい。

「幽隠の終わり」（中山喬章）は、沖縄の神話を現代に呼び込んだユニークな発想の小説で、現代文明への反発と批判を一貫して書いている筆者の、沖縄版と呼べる方向からのアプローチである。筆者の前回の作品「白魔術」でもそうなのだが（まだ改稿が完成していない）、提示の仕方が思いつきの領域を出ずに、表現として現代の読み手一般を動かすほどの精度に達していない。技量の成熟を待つしかないが、着想そのものは悪くない。現代の問題は、原子力発電所にしても、都会の密集した、電子機器の蜘蛛の巣生活にしろ、危険や矛盾は累加している。ますます重く、巨大に広がってくる世界なので、それを相手に格闘し、精神として打ち破るのは並大抵のことではない。現代のほとんどの作家が、あまりの相手の大きさに、その怖さを認識していないのが現状で、とても表現しきることなどできない無力さを露呈している。そういう中では、蟷螂の斧に過ぎなくても、この領域を突き進んでいこうとするのは、希望が持てる。ものが大きいだけに、太刀打ちできない無力さに　徒労となるかもしれない恐れを乗り越えて、前へ進んでいってもらいたい。

総じて、私は現代の若い書き手を信頼し期待している。四回の新人賞に応募された作品を読んで、文章の質の高さ、人間の問題の捉え方、積極的、実験的挑戦など、文章言語による生への切り込みを果敢に実践している。言語文化は、諸々の文化の基礎になるものである。言葉が腐れば、文化も腐る。言葉が死ねば、文明も死ぬ。その意味で、覚醒していなければならない近未来の危機に、この領域を鍛え、文章を通して確固とした意識を樹立しておくことは、それぞれが思っている以上にきわめて重要なことである。次回も作品を待っている。

読みごたえと出来映え

小浜清志

「今日は生きます、でも明日は死にます」加藤拓――短い枚数ではあるが、重いテーマであった。生まれてきた子供の重大な欠陥に悩む親の心情が正直に吐露されていて読みごたえがあった。

「顔」蒼木緑――顔をまともに見れない大学受験をひかえた男の高校生を主人公にして話が展開する。顔という特別な題材をもちいたのは一種の成功ではあったが、小説としての出来映えはというと疑問は残る。しかし心に残る作品だった。

「圭と凛」河埜喜一――十九才の若さで、これだけの作品が書けるということに驚きを覚えた。横山圭と笠井凛の二人の交換日記のような形で物語りは進むが、人間の本質を声高に叫ぶことなくさり気なく示している所など私には「人間失格」も触れている人間が透けて見える気がする。ただこの小説にはエピソードがない。もし級友の誰かが自死したという事件が起こったとしたら、この二人はどのような反応を示しただろう。またまったく違う出来事が現れたとしたらどうなっただろうと考えてしまった。二人だけの世界ではなく、もう少し他の世界も取り入れていたら作品にはもっと深みができただろう。

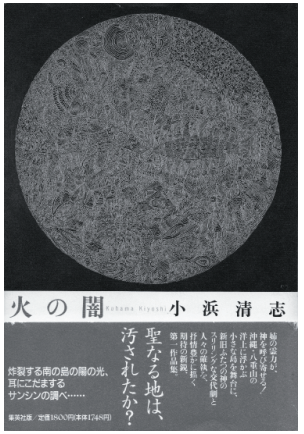
「閃光」鈴木希寿――内気で人見知りの私とは対照的に、生まれつき奔放であった妹はだれからも好かれた。この二人の差は年を経るにつれ広がる。母につれられていったどの習い事も妹のようには続けられない私はついにはこの母の子供ではないのかと空想するようにもなった。中学生に

文芸思潮新人賞
選　評

なった妹は書道で次々と表彰を受け、県の代表にもなり地元の新聞にも取りあげられるようにもなった。母もその知り合いも妹に賛辞を寄せる。私は耐えきれなくなって受験勉強に打ち込むしかなかった。しかし私が高校に入学して半年たった頃から妹の変化が現われる。明るく振る舞い多くの人の羨望を集めていた妹が夜遊びを始め外泊までするようになる。母と妹のケンカは毎日のようにつづいていた。ある夜、仲間と原付で二人乗りし、信号を無視しパトカーに追跡されていた途中に電柱にぶつかって妹は死ぬ。妹の死は私にとって何であったかをそれなりに表現しようとしてはいるが、未熟なままである。私と妹という対照物を書くには筆力がついていけなかった。素材はよかったけれどうまくサバけていない。

「Duplicate」さんし――ＡＩが進んで行くと人間はどうなるであろう。交通事故で妻を失った主人公が退院してからの展開にＳＦが現われる。ギプス生活から解放されスマートフォンを操作していると妻が話しかけてくる。主人公もいつものように応える。仕事に復帰してもその会話はつづいていくのであるが、それは自分の作製したプログラムであるというタネ明しは面白い話ではあるけれど小説としてはかなりむずかしい。

「幽隠の終わり」中山喬章――私の母の生まれた島がいきなり登場してきて興味がわき一気に読ませてもらった。越境編、考察編、新屋敷編、と三編立てになっている。越境編で波照間での不思議が体験があり、この作品のベクトルのようなものが生まれる。そして越境編になるとそのベクトルを得るために会社を辞め、どうすれば神秘的な世界へ足を踏み入れることができるかを考えていた。十年の会社勤めでのたくわえがあるので二ヶ月ほどは図書館で本を読む耽る生活を送る。そして再び波照間島を訪れる。しかし、前回の記憶とはまったく別の事実を知らされる。そして、新屋敷編で石垣島に移住する、という話でまとまるのだが、作者は不思議な体験を小説としてまとめあげようと必死なあまり小説を忘れている。自分の考え方を変えてくれる存在はある日突然、外からやってくるんだという答えは決して書いてはいけないこと。それは表現すべきもので、小説の根幹でもあるからだ。



集英社刊

第５回　文芸思潮新人賞　作品募集

文芸思潮では、新しい世代、新しい時代の小説作品を募集します。清新な感受性、斬新な発想、大胆で挑戦的な構想、画期的な文体や文章による表現など、若い世代でなければできない尖鋭な小説創作を期待します。社会の変化や生活の激変の底に沈む人間の声の爆発、新しい前衛的な試み、新奇の感性、海外の体験に基づく地球規模の体験など、常識を覆すパワーの小説作品をお待ちしています。

●●募集要項

募集内容●オリジナルの短編小説作品。純文学に限らず、SF、エンターテインメント、歴史小説、推理小説など小説ジャンルは自由。これまで同人雑誌などに発表した作品の改作も可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格● 2024 年 4 月 30 日時点において 39 歳以下の者

応募規定● 2 万字以内。ワープロ原稿は A4 用紙 40 字× 30 行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取り、コピーを応募のこと。400 字詰原稿用紙はなるべく使用しない。使用する場合は A4 を用いること。
別紙に①応募部門を明記（**2024 第５回文芸思潮新人賞応募作品と明記**）②タイトル③本名およびペンネーム・どちらも要ふりがな④年齢・生年月日（生年月日のないものは失格とする）・性別⑤〒住所⑥電話番号⑦職業・略歴
　応募者には結果を通知する。

応募審査料● 2800 円（郵便局の郵便為替を無記入で同封のこと）外国からは 20US ドル。切手も可。郵便為替 2000 円＋切手も可。（外国切手は不可）

応募先●〒 158-0083 東京都世田谷区奥沢 7-15-13 アジア文化社
「文芸思潮」新人賞係
TEL03-5706-7847　FAX03-5706-7848　E-mail　bungeisc@asiawave.co.jp

賞●文芸思潮新人賞
最優秀賞■賞状・トロフィー・賞金 20 万円（受賞者 2 名の場合は 12 万円、3 名の場合は 10 万円）
優秀賞■賞状・賞メダル・賞金 3 万円（4 名以上の場合は 2 万円）
奨励賞■賞状・賞メダル　佳作・入選■賞状

選考委員●作家集団「塊」メンバー

締切● 2024 年 4 月 30 日（当日消印有効）

発表●予選通過者は 2024 年 9 月 25 日発売の「文芸思潮」93 号に発表する。受賞作・優秀作は 2024 年 12 月 25 日発売の「文芸思潮」94 号に発表掲載。奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から　新しい世代による新しい小説を期待する。一見平和で、安全に蓋をされている現代の便利な生活のなかでも、噴き出している何かがあるはず。全て表面はきれいに覆われている中に、もっと暴かなければならない人間の本質的な問題が潜んでいる。それらを剔出するような新鋭の作品を期待しています。

顔

蒼木 緑

積み重なる日々の中、あたりまえに溶け込むうちに存在さえなくした空虚な曇り空だった。

「来年からは受験勉強が本格化するから各自気持ちを引き締めて勉学に取り組むように」

という担任のありがたい言葉を背景に流しながら、その薄灰をぼんやりと眺めた。

学生の時分を、人々はやれ青春だの、やれ人生の中でも特に尊い輝きだのと囃し立てるが、渦中にいる人間からすれば、機械的に繰り返される日常を用意されるまま過ごしているだけにすぎないと感じる。

朝の七時に目を覚まし、マーガリンを塗った食パンを開かない喉に押し込み、牛乳で流す。黒い学ランに袖を通し、地味だが物がよく入る黒い大きなリュックサックに今日使う教科書と参考書を詰める。ニュース番組をぼうっと眺めて、バスの来る時間に合わせて家を出る。

歩いて十分、待って五分、乗って三十分。学校の目の前のバス停で降りて、教室へ向かって、授業に出て、勉強して、帰宅して、食べて、寝る。明日も同じだ。

学生の本分に向いた頭をしているようで、学校で教えられる勉強の理解には困ったことがなかった。

東北の片田舎の進学校である我が校は近所の国公立大学が進学実績のほとんどを占めており、二者面談での担任の「東大も目指せるんじゃないか」という期待混じりの声は若干上ずっていた。僕は目線を机に向けたまま「じゃあ」と行く先をそこに決めた。

たぶんこのまま、周囲の言われるまま動くのだと思うし、

実際動けるのだと思う。自発的に何かをしようということもなく、人間のあたりまえと僕のできることを律儀に拾い集めていくうちに僕は大人になっていく。年を取っていく。命を使い、老いていく。

予備校には通っておらず、いつも学校が閉まるまで学校にいる。図書委員を買って出て、図書室のカウンターで来訪者を待ちながら、そこでそのまま勉強している。人はそうそう来ないため、基本的には貸し切りだ。

この図書室は大して広くない。平均的な男子高校生の背丈より少し高い本棚に名前順で一般書籍が並んでいる。すみっこの日陰には図体のでかい辞典が誰に読まれることもなく埃を被って鎮座している。

日が傾き始めた時に鎌で刈り取るように差し込んでくる眩さがわずらわしくて、カーテンを閉め人口の明かりで室内を照らしている。勉強するのに存在を主張する現象など必要ないのだ。

変わらないものは存在しないことと同じだ。スイッチひとつで一定の光を与え続ける照明。使う人もなく、やがて図書室をそれらしく見せるためだけの壁紙と貸した辞典。衣食住、生活、家族、自分。

人は変わらず在るものを存在しないものとして扱う。それが慣れであり、あたりまえということだ。

僕は存外、このあたりまえが好きだ。変化は恐ろしい。世界が常に未来に歩み続けているがために、ただ今この時に在り続けたいと思うことは、立ち止まることではなく世界の足並みから外れて後ずさりすることになるらしい。

だから変化の最後尾で、どうか変わらぬようにと、未来が勇んでこちらに向かってくることのないようにと、息を潜め、乞うような気持ちで与えられるままを生きている。

樹上を薄桃に彩った花弁はいつの間にか散り落ち色褪せ、縁石の側に砂色の吹き溜りを作っていた。

学年が上がろうと何が変わるというものでもない。

学校が閉まるギリギリに下校し、いつも通りに出された夕飯を食べていると、母がおずおずと

「進路どうするの？」

と声をかけてきた。僕は目線を味噌汁に向けて

「東大受けようと思う」

とだけ答えた。そのまま味噌汁を手にとり、箸で少しかき混ぜて沈殿した味噌を均してから一口飲む。今日は少し味噌が濃いようで、乾くようなしょっぱさが喉を通った。

「そう、無理しちゃだめよ」

「別にしてないよ」

「なら、いいけど……」

俯いた視界の上方ギリギリに見える母は、その手に持った箸を軽く握っては緩め、次に口に運ぶ食材を掴む素振り

を見せない。箸がその用途を忘れられ手慰みにコロコロ転がされるだけの物体に成り果てかけたその時、母が静かに呼吸を整え、

「蓮」

と一言、僕の名前を呼んだ。

「なに」

「お母さん、何かした?」

「何かって?」

漠然とした質問に具体性を求めつつ、白米を口に運ぶ。そういえば、白米はおかずありきの主食で、これを一つの味として考えたことはなかった。

「お母さん、蓮と目があったことろくにない」

痛いところを突かれた。あたりまえの中に紛れ込ませたその行為を、面と向かって突きつけられた。飲み下した米の味はよくわからなかった。

「いや、それは……」

返答に困った。目線に困った。母の箸は緊張した手に固く握られている。

「別に、母さんはなにもしてない」

「じゃあなんで」

「見なきゃいけない理由でもあるの?」

「そんなことわざわざ聞かせるようなことをお母さんはしたのかって、心配なの」

「してない」

「じゃあ見てよ」

「催促するようなこと?」

「今年は受験で忙しくなるでしょう。大学に受かれば家を出ていくことになるし、そのまま就職すればどんどんお母さんが蓮と過ごせる時間はなくなっていくのよ。一度息子の顔を、ちゃんと見たいのよ」

そう言われると、もう逃げることはできないと思った。

観念したように、漫然と鯖の塩焼きに向けていた目線をじわじわと上げていく。視線が重力を持つ。母の夕食、母の手。僕の呼吸。息を吸う。母の喉元。僕の身体を強引に揺さぶる鼓動。母の唇、母の鼻。僕は吸い込んだ息を吐く。肺の空気が抜けていく。あたりまえの動作の一つ一つが自らの存在を今更思い出したかのように浮かび上がり、僕の動きを遅くしていく。

そして、ようやく目線は母の目に辿り着いた。その目は悲しげだったが、涙はなかった。記憶にある顔より少し小皺が増えていた。

その顔をじっくり観察する間もなく、その顔は急激に形を変えていった。

瞼はハリを失い吸い込まれるように奥にくぼみ、目元の皮膚は重力に負け蝋が溶けていくように垂れ下がっていく。肌は干からびて弾力を失い底の見えない谷を思わせる深い

皺がいたるところに刻まれ、豊かだった黒髪は白く儚く揺れている。

これが、これが嫌なのだ。これが怖いのだ。母に思うところなどない。今更言葉にすることではないが、母を愛している。愛しているから恐ろしいのだ。

覚えている限りで、この光景を自覚した最も古い記憶は四歳の頃のものである。人と目を合わせると、その顔が老いていく。見つめた途端ぐちゃぐちゃと形を変える肉。若くみずみずしさに溢れた同い年の友人の顔が、目を合わせた端からすぐそばに命の終わりを感じさせる顔に変貌するさまが恐ろしかった。

人見知りでよく泣く子なのだと親はよく他人に言って笑った。現実に影響を及ぼすことのない、僕だけが持つ視界が孤独だった。

七歳の時、目を合わせても顔の変わらない同級生に出会った。横から見たときのその顔が、桃を思わせる柔らかくまろい頬が、姿を変えることなくそのまま僕に向けられていることがどうしようもなく嬉しかった。あたりまえを享受できる喜びを両手いっぱいに抱きしめた。

数ヶ月後、その桃の顔を白い棺桶の中で見た。交通事故だった。最期のお別れをとその子の顔を眺めたとき、風前の灯火が如きしわがれた顔とは唯一無縁だったその子の眼差しを思い出し、そして僕の目の正体に思い至った。

僕の目は、目を合わせた相手の死相を見ている。

この子の顔が変わらなかったのは、その顔が最期を迎える時のものだったからだ。

この瞬間、死という不可逆の終わりが誰しもに来ることを唐突に理解し、凍えるような緊張が背後から迫りくるのを感じた。先の見えない暗闇から、しかし確実に、鋭く研ぎ澄まされた死の刃が、命の形を保つ薄く脆い皮に、常に突きつけられていることを感じた。

死を見据えたことで、僕は「生きていること」を感じた。生きて、意識を持っている。生きて、食べている。生きて、話し、生きて、動き、生きて、呼吸し、生きて、生きている。

動作一つに僕の生きる意味が付随する。あたりまえとして処理することで空けていた脳のスペースが、生きることの一つ一つの存在感に圧迫され、情報の奔流に呑まれた。

生きることは死にゆくことだ。まばたきの一瞬のうちにすら、誰しもが死に向かっていく。死は必ず在る。誰の未来にもある。存在している。いつも傍に居る。生きるほどに感情が増え、大事なものが増え、そしてそれら全てを失う日が近づいてきている。知識としてわかっていても、日頃から意識するようなことではない。ないはずのことが、頭を常に占領するために、疲弊して、消えてしまいたいとさえ思った。

そしてやがて、全ての能動をやめた。生きることをやめ

るのはどうにも難しく、また親不孝をしたいわけでもないため、ただ考えることをやめた。

求められるままに生きる。流されるままに生きる。習慣化された行動をなぞる。行動に意志を加えない。他人の人生に介在しない。顔を見ない。死を見ない。親しい人の、愛しい人にいつか終わりが来ることを、それをまざまざと見せつけられるつらさを、四六時中抱えて生きていたくなどない。

そんな思いをひとしきり巡らせたのち、表情筋の強張りを悟られる前に

「もう十分でしょ」

と言って母の顔から目を逸らした。母が寂しそうな声色で

「今言うことでもないけど、立派になったね。ありがとうね、受験頑張ろうね」

と呟いたのが右耳から聞こえ、胸を占める虚しさと歯がゆさに喉が詰まって言葉が出てこなかった。味のしない夕食を、口内の水分をことごとく奪う味噌汁でどうにか流し込んだ。

そんなあたりまえから少し逸れてしまった日の翌日だったからだろうか。放課後、担任の頼まれ事をこなしていつもより少し遅く図書室に向かったところ、そこに繋がる廊下の突き当たりでアメリカンフットボールもかくやというような人間同士の正面衝突を果たした。注意力散漫と日頃の運動不足が祟り、ものの見事にバランスを崩し背後に向かって転倒した。

「いて……」

「ごめんなさい！　大丈夫ですか？」

まっすぐに飛ぶ一筋の矢の引き連れた風が、立ち込める霧を切り裂いて晴れ間をもたらすような、爽やかで芯のある声が頭上から振ってきた。その鮮やかさと、ついで出された手のひらに、僕は思わずその声の方向に目を向けてしまった。

気付いた時には遅かった。僕の目と彼女の目が完全に噛み合った。

まずい、と思った。またアレが始まる。突発的な出来事に目を逸らすことも忘れてアレを待つも、見えたのは先ほどから一点の揺らぎもない彼女の顔だけだった。こちらの心配をしてか、瞳がゆらゆらと不安げに揺れている。

時刻は午後六時十分。差し込んだ夕日が、今を生きる彼女のその顔の左反面をまばゆく照らした。肩につかない長さでストンと落ちた黒髪は日没の海のように波打ちながら光を反射し、光に透かされた束は明るい茶を帯びて軽やかに舞った。そして、頬骨に沿ってなだらかなカーブを描く、まろやかで陶器のように白く透き通る肌と、下がった眉の少し下で存在を主張する、西日を受け奥深く琥珀のように

輝く茶褐色の瞳。

「綺麗だ……」

思わず口をついて出た言葉に、僕自身が一番動揺した。咄嗟に口を塞ぐ僕を前に、その一言を聞いた彼女は途端少し怪訝な顔をして一言、

「……ナンパ？」

と吐き捨てた。

「あ、違う。そういうんではなくて、えっと、ごめん」

「なんの謝罪？」

「ぶつかったことと、……変なことを言ったこと？」

怪訝な顔はしていたものの、差し出した手が引き戻されることはなかったため、厚意に預かり引っ張り起こしてもらった。存外に強い力だった。

「まぁ、いいや。ていうか君、宮地くん？　図書委員の」

「そうだけど」

「よかった。本借りたいのに図書委員いないから困ってたんだよ。手続きしてくれる？」

それを了承し、彼女の背を見ながらつれだって図書館に向かった。彼女は目当ての本を取りに行き、僕は西日を遮るためカーテンを閉め始めた。

すると、そのカーテンレールをランナーが爽快に走るシャラシャラと高い音を聞いた彼女が、

「え、なんでカーテン閉めてるの？　まだ暗くないじゃん！」

と遠くから大きな声で問いかけてきた。いつも閑古鳥が鳴いているからいいが、本来図書室は私語を慎む場所だ。

「だって、眩しいし」

図書室のマナーを忘れられない僕は、この場所へのせめてもの礼儀にと最低限の声量で返事をした。

「えー、綺麗じゃん夕日。もっとこの空気を楽しもうよー」

その軽い口調を無言で受け流す。そのうちにカーテンを閉め終え、照明のスイッチを触る。人口の動かない光が室内を満たした。

ルーティンを終えた僕は、カウンターに備えられた作りの悪く腰掛けるたびギシギシと叫ぶ椅子に浅く座り、分厚い参考書と数冊のノート、くたびれた筆箱を取り出した。

「それにしても意外だなぁ。宮地くんって人にああいうこと言う人ってイメージなかったよ」

数冊の本を抱えてカウンターに向かってきた彼女は、先程の不自然な話の切られ方を全く気にしていない様子で新しい話題を振ってきた。

「イメージって、僕はそもそも君を知らないんだけど」

「え、うそ？　同じクラスじゃん！」

「そうなんだ」

「そうなんだ、って……。はぁ、まぁ宮地くん人のこと見てないって話題だしね」

「話題なの？」
図書委員としてすべきことをした後はてきとうにあしらうつもりだったが、呆れたような様子でクラスのことを語る彼女から漏れた僕の話に少し興味を持ってしまった。
「話題っていうか、『すこぶる成績はいいが人と関わることに消極的で、かつ目を絶対に合わさない図書室の主、さてはメデューサの末裔か』みたいな茶化され方はしてるよ」
「末裔……ずいぶんでかくでたね」
いつの間にか誇張され伝説じみた存在になっていた自分に少々面食らいながら、差し出された図書カードに貸出を受け付けた証明のはんこを押す。
「だからさっき面と向かって『綺麗だ』なんて言われて、事前情報とのギャップにビックリしてるわけ」
この瞬間、僕は彼女の話を聞き返したことをかなり後悔した。この出会いごとなかったことにしようとしていたところを、ふいの興味で長引かせ、一番痛いところをことさらに取り上げられてしまった。
「……それ、もう掘り返さないでくれる」
恥ずかしくいたたまれない気持ちに満たされた僕は、少しの不機嫌を織り交ぜ抗議の言葉を発した。
しかし、彼女はそういった言外のコミュニケーションを知らないでか意図的に無視してか、
「褒められて悪い気しないし？　せっかく噂の末裔クンと目があったことだし？　いろいろ聞いてみたいじゃん」
と詰め寄ってきた。
「パーソナルスペースってもんがあると思うけど」
「まぁまぁ、人生一期一会ですよ。今日の出会いに乾杯ということで、素直な気持ちを教えてくださいな」
優しげな笑みを浮かべてはいるが、その笑顔にしっかりと「納得の行く答えを引きずり出すまで帰らない」と書かれているのが見えた。観念した僕は、
「久々に人の顔見たから驚いちゃって」
ととりあえずぼんやりとした回答をした。
「驚くと、口説いちゃうの？」
「いや口説いてないけど」
からかいのニヤけ面に食い気味に反論すると、音のなる面白いおもちゃを見つけた子供のような様子で彼女はケラケラと笑った。
はやくいなくなってくれないだろうかという心を顔にそのまま反映した仏頂面の僕を、彼女はやんわり目を細めて見つめたのち、少し下がったトーンで
「……顔が綺麗ってどんな感覚なの？」
と囁くように尋ねてきた。
「どんな感覚って、どういうこと？」
質問の意図が掴めず、僕は素直に聞き返した。先程までのほどよく軽く乾いた空気から一転、言い知れない湿度が

空気に混じったことを察して、肌が少しぴりぴりとした。
すると、少しバツの悪そうな顔をした彼女は、「一期一会って言ったの私だしな」と自分に言い聞かせるように呟いてから、
「私、相貌失認なんだよねー。そうぼうしつにん、わかる？」
と切り出した。
「他人の顔が覚えられない、顔を顔と認識できないってやつ？」
「さーすが我がクラスきっての秀才クン。話が早くて助かるよ」
「そういうのいいから」
秘密を打ち明けるときのじんわりと重い緊張を、努めて朗らかな態度をとることで誤魔化そうとするのがどうにも気に食わなくて、すげない態度を取ってしまった。
「はーい。では、そういうわけなので、私の顔を見て『綺麗だ』と述べるその心の動きがどのようなものかを知りたいのです。宮地くんにとって、顔とはどういうものですか。何を指して綺麗と言ったのですか」
また、目を合わせてしまった。やはり彼女の今がそのまま見えた。僕の目から血に通じ、肌を透かして内蔵の奥の奥まで、そして細胞の一つ一つに至るまで、大地の下を流れる赤黒いマグマのようにじりじりとゆっくり、しかし確実に僕の全てを焦がさんとするような熱い眼差しだった。
その眼差しに灼かれつつあった僕が、
「僕にとっては」
とむきだしの心を引きずり出しそうになった時、次に僕の言葉が紡がれるはずだった時間は、『下校の時刻になりました』という無機質な放送に奪われた。僕の彼女の二人の声だけが響いていた図書室は、いまや蛍の光に満ちている。
すっかり調子を狂わされた僕がぽかんとその放送を聞いていると、
「残念、じゃあまた明日ね」
と彼女は告げ、借りた本と図書カードを大事そうにスクールバックに詰めてさっさと図書室を立ち去ってしまった。
一人残された僕は、こんな問答が明日も続くくらいなら今日でさっさと終わらせてしまえばよかったとどうしようもない後悔に襲われ、結局使わなかった勉強道具をすごすごとリュックに詰めて図書室をあとにしたのだった。
「ほんとに来た」
「そりゃ来るよ、私は有言実行の女だもん」
呆れながら言った言葉に調子のいい返事が来る。いつも通りの放課後、いつも通り図書室のカウンターに居場所を作っていると、いつもはいない彼女が今日も来た。昨日の

今日をいつもとは呼ばない。
さすがに一日で本は読みきれないようで、彼女はただ昨日の問答の続きを始めるためにここを訪れたようだった。
「君、そんなに褒められたいの？」
「清水だよ、私の名字」
「……清水さん、褒められ好きなの？」
「宮地くん、私が聞きたいことわかっててわざとずらしてるでしょ」
清水さんは「もー」と形式的な苛立ちの表現を続けたが、そこに本当の怒りがあるようには見えなかった。聞きにくいことを掘り返している自覚がある手前、踏み込みにくい気持ちもあるのだろう。
「あいにくこっちにも事情があるもので」
と僕は清水さんとの間に線を引いた。
清水さんが聞きたいことはわかっている。僕にとっての「顔」とはなにか。五感に関わる機能とは別の、識別としての顔。人間の美的感覚に最も訴えかけてくる部位。清水さんが理解しがたい「顔」の感覚を、彼女の顔を「綺麗」と評した僕に詳しく言語化しろと急かしているのだ。
ただ、仮に僕がこの問いに協力的だったとして、彼女の望む答えを与えることはできなかっただろう。なぜなら、僕も標準的な「顔」とその意味を知らないからだ。僕の中にも一般的な美的感覚はなく、ただそこに今在るままでいてくれる普通の顔だったからこそ、清水さんを綺麗と思ったのだ。
それを説明するには僕をあけすけに開示しなければならないが、出会って二日の人間に全てを明け渡せるほど僕は開放的な人間ではなかった。
こんな調子でのらりくらりと彼女の質問をやり過ごす日々が続くうち、ぽつぽつと世間話が交じるようになり、そのうちに命の芽吹きを感じさせる春の穏やかな陽気は夏のうだるような熱気に変わっていた。
正直癪だが、彼女のいる図書室があたりまえになりつつあった。
彼女は来るのが少し遅い。「放課後すぐ集合ね！」と言ってくるわりに、三十分は当然のように遅れてくる。何をしているのかとわざわざ問うほど親しいわけではないし、とりたてて知りたいとも思わない。どうせ友人との話に花が咲いてとか、そんなよくあることだと思う。ただ、時間にルーズなのだなぁと、ぼんやりそんな印象を持っている。
「清水さんはどこの大学目指してるの」
「え、全然考えてなかった」
例えばこういうところだ。僕のように人生に悲観的ではなくむしろ楽観の権化と言っても差し支えない彼女は、未来というものをまるで考えていなかった。

とはいえ、進路選択に関しては僕も他人に言われるままに第一志望を決めた人間であるため、他人にとやかく言う資格はないことはわかっていた。それでも一般的な感性として
「目標ある方が頑張れるよ、たぶん」
と参考書の問題に目を通しながらアドバイスを投げた。
「それは一理あるね。うーん、宮地くんはどうなの」
「東大、ってことにしてる」
「わ、すご。ほんとに頭いいんだね。って、『ことにしてる』ってなに？」
「まぁ、色々あって」
我ながら雑なお茶の濁し方だと思ったが、清水さんは
「宮地くんは様々な事情にまみれている人間なんだねぇ」
と、これまた雑なまとめをして突っ込まずにいてくれた。
そんなふうにして清水さんという非日常が日常に溶け込み、学校の外がヒグラシの人生最期の大合唱に包まれる頃、その騒がしさに紛れるように、
「僕が本当にメデューサの末裔だったらどうする？」
などというわけのわからない問いを投げかけてしまった。
人気の小説家の文庫本に目を落としていた清水さんは、目線は動かさないまま頬だけを少し緩め、「宮地くんにしては珍しい質問するね」と言ったのち、
「でもなぁ、何度か宮地くんと目を合わせても私は石になってないから、噂はガセだったってもうわかっちゃってるんだよなぁ」
とカラカラ笑った。からかうような、気安いようなその答えの雰囲気が切れぬうちに
「じゃあ僕が人の死期がわかる人だったらどうする？」
と続けた。清水さんはこれを仮定の延長と思ってくれたようで、
「どうせなら私の死期を聞いてみたいような、聞きたくないような」
と答えた。
その答えを聞き、少し迷ったあと、しかし勢いのまま
「ほんとだったら、どうする？」
と問うと、
「え、どこからが？」
とふいに顔を上げた清水さんが僕を見た。
その後、思い出したように目をそらした彼女が
「もしかして、遅効性の石化……」
と不安そうに呟くものだから、
「しない。末裔は嘘。ていうか勝手な噂」
と早々に訂正した。
「顔の話。清水さん聞きたがってたよね」
「随分唐突だね？　別にいいけど」
僕もそう思う。

「清水さんの質問から逃げ切れるほど一年は短くないし、夏になっても通ってくるような人が今更諦めてくれるとも思えなくて」

これは半分本当で半分嘘である。清水さんが諦めの悪い人間なのはこの数ヶ月でなんとなくわかった。弓道部に所属していた彼女の一つを突き詰める精神性がそうさせるのだろうか……などという分析もした。

ただ、彼女の精神性だけが僕をこうさせているというのは嘘だ。僕は少なからず彼女に親しみを抱いている。僕と彼女はそんなに仲がいいわけではない。教室では話さない。放課後の、学校が閉まるまでの、図書室だけの仲。そんな局所的な関係でも、彼女は彼女にとって結構な重大事項であったであろう相貌失認という状態を開示したうえで、こちらに言葉の真意を問うてきた。

最初こそ強引さがあったが、継続的に接してみれば彼女は存外人の歩調に合わせてくれる人間だった。こちらに都合の悪い話を明らかに濁してもそれ以上深く突っ込まない。彼女も知的好奇心は捨てないが、離れようとすればこちらがほしいだけの距離をくれる。それがどうにも心地よくて、その居心地に少し報いてもいいのではないかと思ったのだ。

それに、これ以上彼女のほしい答えを持たない自分が、彼女の時間を奪う心苦しさもかなり強かった。僕は受験生という大事な時期の時間を奪う責任を負えるような人間ではない。

「僕は他人の死相が見えるんだ。目を合わせるとその人の顔がその人の死ぬ瞬間の顔まで老いていってしまう。だから怖くて人の顔を見られなかった」

それからは堰を切ったように、幼い頃の経験、受動的な生き方について説明した。人に相談したことがなかったものだから、とりあえず考えつくままに語るうち、理路整然といかない言葉たちが滑っていった。そのうちこの状態を俯瞰する思考が分離していって、じわりと汗をかきながら、動くことだけはよくできる口を見下ろし、なんとも見苦しいな、と他人事のように思っていた。

説明にやっと一区切りついたところで、それまで僕のしどろもどろな独壇場を静かに聞いていた清水さんがゆっくり口を開いた。

「えっと、ごめん。ついていききれないんだけど、それが本当だとして、じゃあ私に向けていった『綺麗』はなんだったの？」

僕の突拍子もない告白を笑うでもなく、理解を試みようとしてくれる清水さんに安堵のような心地を覚えながら、僕は正直に告げた。

「清水さんの顔は変わらなかったんだ。揺らぎがなくて、今が見えた。それが珍しくて、はっきりと見える輪郭に驚いて、つい……」

「なんだ、じゃあ宮地くんもみんなの言うような『綺麗』の感覚はわからないんだ」

「うん、ごめん、今更」

「いや、いいよ。むしろ納得がいった。つい口をついて出た言葉が照れくさかったにしても、こんなに焦らすことある？　って私も不思議だったから」

「信じてくれるの？」

この年になってなんてしょうもない夢を見ているのか、と笑われても仕方ないと思っていた。それをこうもすんなり受け入れてもらえると、かえって臆病な気持ちが湧いてきた。

「私も他人があたりまえと思っている感性がわからない気持ちを知ってるんだよ。なのに私の中にない感性が宮地くんにあることを一蹴なんてできないよ。それがどんなに突拍子のないことでもさ」

と、彼女はまるで世間話の一つかのように、淡々と僕の状況を理解し、受け入れた。

「それに宮地くん、驚くと口説いちゃうこと以外では軽いこと言ったり意味のない嘘をついたりする人間じゃないってわかってるから」

「だから口説いてはいないんだって」

しおらしく清水さんの懐の深さに感服しているところだったがそこだけは、と早々に訂正すると、お決まりのやり取りに満足した笑みを浮かべた清水さんが「はいはい」と返してきた。

「ところでさ、宮地くんの言うことをそのまま信じるなら、私は近いうちに死にますよってこと？」

「あ、えっと……そういうことに、なる、かも」

流れでつい僕の「綺麗」の正体を語ってしまったが、清水さんに確認されてやってしまったと思った。こんな若さであなたはもうすぐ死にますよなどと告げられて気分の良い人間などいるはずがない。

どう答えたらいいものかと迷っていると、清水さんは「なるほどねー」とぼんやり呟いたあと、風船にでもなってしまったのかと思うほど長く大きく息を吸って、今度はゆっくり細く吐き出した。そしてひとしきり吐き切ったあと、

「じゃあなってあげようか、私が宮地くんの『今』に」

と僕の目をがっちりと見定めて高らかに告げた。僕に向けたものであり、天地神明に誓ったような重い覚悟のある言葉だった。

「え？」

「死相なんてファンタジーがあり得るなら、私だって不老不死かもしれないじゃん。それに過去に死相のとおりになった人間がいるといっても、それってたった一例でしょ？　信頼に値する数値とは思えないな。偶然かもよ？　もしくは、その一例が許されるのであれば、私が唯一宮地くんの

目の通用しない人間である可能性だって捨てちゃいけないよね。どう？」

ここにはいつもの人工の明かりしかないはずなのに、清水さんの周りだけいやに眩しかった。心臓が身体から飛び出てスキップしたいような、しかしそんな都合のいい甘い言葉に乗ってはいけないと締め付けるような、どっちつかずの不安定で忙しない気持ちだった。

清水さんの言葉を信じたい。

僕の心を他人に預けるのが怖い。

そんな葛藤の中でやっと絞り出した言葉が

「なんでそんな僕に構うの」

だった。我ながらひどい突き放し方である。

「なんでだろうね。最初は秀才クンの思考の片隅を覗いてやろうみたいな好奇心だったんだけど、見えない未来に怯えて、人との関わりを断って、人生の楽しみ全部捨ててるような人なんだってわかったら、なんかいたたまれなくなってきて」

僕の投げやりな質問を全く気にしていない様子で彼女は答え、続けた。

「あと単純に、辛気臭い声聞いてると、こっちまでごちゃごちゃしてくるから、吹き飛ばしちゃいたくなるんだよね。エゴだよエゴ。私のおかげで救われる人を見て満足したい。これってエゴでしょ。せっかくここまでだらだら図書室で過ごしたよしみだし、本質的には宮地くんのためじゃないから、宮地くんは渡されるエゴを勝手に享受してくれたまえ」

僕には寄り添わない。清水さんの自己満足のためのお節介。

その横暴な幸福の譲渡が僕にはちょうどよかった。他者をあたりまえの風景に押し込んで、なかったものにしている僕に、純粋ないたわりと無償の優しさは重すぎるのだ。

このやり取り以降、清水さんは少し強引になった。「四季の移ろいを感じよう」と言い、日が登っているうちのカーテンが禁止された。勉強は日が沈んでから一緒にしようと決められた。

そして僕の腕をがしりと掴んで窓際に来させては、「空を見よう」だの「山を見よう」だのと言ってきた。

空も、自然も、正直嫌いだった。空には一日の、自然には一年の動きが見える。時が動いている。未来が来ている。人間とサイクルの異なる生物が生と死を繰り返す。そしていずれ我々にも同じ終わりが課されている。

そのような俯瞰した未来を見てしまうたび、清水さんは「ほらあの雲見てよ。馬っぽくない？」や「あそこに見える田んぼ、秋になったらキラキラ光って綺麗だろうね」などとありふれた感想で見えるだけの今を語った。今を忘れて時の中に彷徨う僕を、いつか来るその時の存在に怯え全てから目を背けた僕を、この図書室に戻してくれた。

ある日、いつも通りぼんやりと外を眺めている時、

「顔がわからないってどんな感じなの」

と清水さんに聞いた。最初の邂逅以降、触れなかった話題だった。

「うーん、パーツはわかるんだけど、それが『顔』っていうまとまりに統合されなくて、個性として認識できない感じ？　まぁ簡単に言うと顔で人を覚えられないんだよ」

「大変じゃないの？　苦しくないの？」

他者とわかりあえない部分があることを明確に認識してなお、なぜそんなに明るく振る舞えるのか。唐突に強く知りたくなって、矢継ぎ早に問い掛けた。

すると、彼女はあっけらかんと

「別に？　顔だけがその人の全てじゃないし、顔がわからないことが私の全てでもないでしょ。その他の部分を楽しめればいいと思ってる」

と言い放ち、そのまま続けた。

「宮地くんもそうだよ。宮地くんの目はもしかしたらその人の最期を見るのかもしれないし、それは怖いことかもしれないけど、それは宮地くんの全てじゃないよ。頭いいし、こうやって構ってくれるし。そういうとこまで全部見ないふりする必要なんてないよ」

清水さんがエゴと名付けるこれは、つまるところ彼女から僕への世辞も気遣いもないありのままの言葉ということだ。

僕を慰めるための体のいい言葉ではない。僕を癒やすために選んだ優しい気持ちとも違う。包装のない、値札のついたままのプレゼント。そんな無骨な言葉だから、一直線に僕の心の柔らかい部分を刺した。

僕は一つの個性で形作られる存在ではない。僕の目は僕の人生の全てではない。胸に居着いて離れない恐怖が、それ以外の個性が存在を主張することによって薄まるのを感じた。

軽くなった心についつい口まで軽くなって、また彼女の言葉通り救われてしまっている自分がどうにもこそばゆくて、

「もしかして、口説かれてる？」

と茶化すと、

「どうでしょう」

と濁された。

「僕、顔の美醜はわからないけど、清水さんのこと改めて綺麗だなって思ってるよ。今度は『顔』の話じゃない。考え方とか、生き様とか、そういうところ」

晴れやかな心地が僕の素直な気持ちをこぼさせた。彼女の顔を見る勇気はない。

「おや、これはもしかして？」

見なくてもわかる彼女のニヤついた声に、
「どうだろうね」
と曖昧に濁した。

清水さんの視点を通して、僕も少しずつ今にピントが合うようになった。夏の突き刺すような日差しにピリピリと焼ける肌。体育の後に教室を満たし混ざり合う、甘かったり爽やかだったりする制汗剤の匂い。机や椅子が太陽に照らされてできる無機質な影模様。

炎を樹上に宿したかのような鮮烈な紅葉。木枯らしにはためき命を持つコート。空に翻る巨大な魚が夕日に光る鱗雲。

曇り空ですら、影の青や太陽のかけらの黄が透けて細かい表情を作るのが見えた。

図書室の目から世界が変わって見えた。終わりを語るために存在していたはずの生の数々が、有限だからこその今を謳歌しているように見えたのだ。

冬になると日照時間が減り、カーテンを閉めるのが早くなって、必然的に勉強時間が増えた。相変わらず全く人が来ないため、定位置はカウンターから四脚の木製の椅子が置かれたテーブルに移った。机を挟んで向かい合い、カリカリとシャープペンシルがノートに文字を記す音が響いた。

去年からずっと僕の成績は受験を心配するようなものではなく、既知の情報をなぞり返す作業に飽き飽きしてふっと集中が途切れた。そのまま問題を解く手を止め、ぐるっと図書室を見渡して、本棚を律儀に一段ずつ目で追った。漫画でわかることわざ辞典や一際大きな昆虫図鑑など、存在を知らなかった多様な本があるというどうでもいいことに気付いた。

見える範囲の背表紙を確認し追えてから、そっと目の前の清水さんを眺めた。

黒い髪が少し肩にかかってゆるい曲線を描いていた。「左利きだから国語以外手が汚れて嫌なんだよね」と笑っていた彼女の手は、ノートに記された数学の回答の上を踊って確かに黒く汚れていた。

ふいに、なんでもないこの時間が無性に愛しいと思った。複製された繰り返しの日々を過ごしていたはずで、今日この時の図書室の勉強だってありふれた作業の一つのはずなのに、清水さんと過ごす瞬間は経験以上に貴重だと感じた。

「清水さん、結局大学どこ行くの」

喉が渇くような緊張を感じながら、絞り出すように声に出した。彼女の未来を知りたかった。彼女の歩むこの先を。

「東京の大学受けるよ。東大ではないけど」

清水さんがこちらを見ずに地道に関数の作図をする一方、僕は体が重力から解き放たれて宙に浮くような心地がした。彼女の未来と僕の未来に交点が存在する可能性を見たから

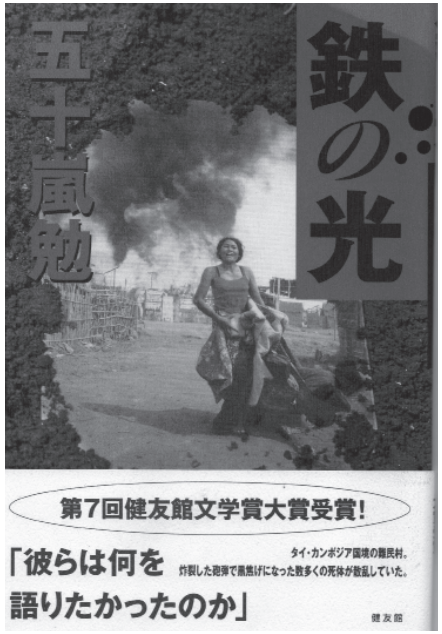
だ。

しかし、僕だけが舞い上がっていることをことさらに知られるのも恥ずかしく、
「そうなんだ」
と短く返すに留めた。すると、作図の手を止めた清水さんは、こちらを向いて右手で頬杖を付き、
「淡白だねー。嬉しいとかないの？　この清水と生活拠点が同じになるかもしれないんだよ？」
とシャープペンシルをノートにトントンと刻みながら、尊大な言い回しをして僕の意見を問うてきた。彼女の少し赤らんだ頬に気づいてしまった僕は、取り繕う理由を見失い、
「嬉しいよ。嬉しいから、清水さん。ちゃんと生きてよ。僕の目が嘘っぱちなんだって、証明して」
と正直な胸の内を明かした。

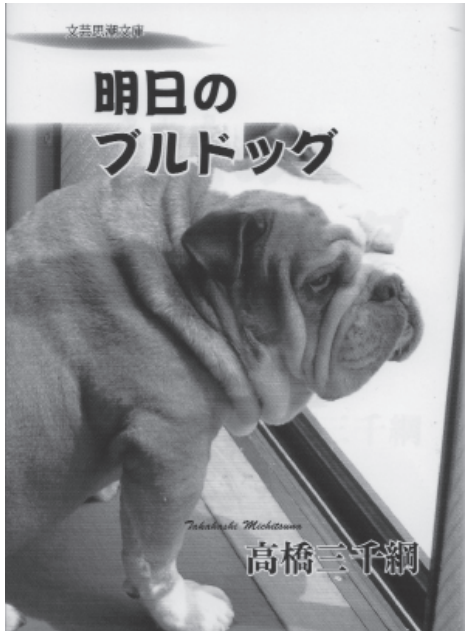
彼女と過ごす明日がほしい。彼女と笑う未来を見たい。清水さんの顔をしかと見つめた。一切の揺らぎのない顔。照れくさそうに眉を下げて困ったように笑っている。どうか、彼女の歩みがここで止まることのありませんように。

「あたりまえでしょ。私は有言実行の女だよ。東京行って垢抜けてビル群を颯爽と闊歩してやるんだから、余計なお世話」

彼女は嘘をつかない。取り繕わない。だからこの言葉だっ



税込 1700 円
御注文はアジア文化社まで



税込 500 円
御注文はアジア文化社まで

て真実だ。
「そんなことより勉強教えてよ。ここわかんないんだよね」
マーク試験を数日後に控えた日、いつも通り閉門時間まで学校にいて、帰宅し夕食を囲んだとき、いつもとは異なる感覚に気付いた。
じっとりと地べたに向かってしまうような視線の重さがまるでないのだ。母の顔を避けて持ち上がることを拒んだこの目は、いつの間にか目に見えない死の予感から逃げることをやめていた。
常ならざる感覚にむしろ鼓動が高鳴った。ご飯の盛られた藍色の茶碗をつかむ左手が汗で少しおぼつかない。
「母さん」
と一言呼びかける。目線を上げる。母の夕食、母の喉元、母の鼻。笑ってしまうほどスムーズに、自然に母の目を見据えた。
母の顔はこれまで通り死に向かって歪んだ。それでもも う己の胸の内に全てから逃げ出してしまいたくなるような根源的な恐ろしさはやってこなかった。
「今まで避けててごめん。これまで不自由なく育ててもらって、母さんには本当に感謝してる。ありがとうございます。僕、頑張るから」
否。やって来てもなお、明日を生きたいという希望が湧いていた。いずれ死ぬのだとしても、それまでにたくさん物事を見て、精一杯感じて、生ききりたい。後悔のないように、僕が僕らしくあるために。月並みだが、そう思っている。月並みなことを自然と考えられるようになっている。
何が、も、いきなりどうして、も何もかもわからない唐突な宣言に、それでも母は深くを聞かず、ただ
「大丈夫、信じてるよ」
と笑った。今の母の本当の顔は相変わらず見えない。しかし、皺の刻まれた顔の下で、今この瞬間に湧き出る愛が生きていることは感じられた。
マーク試験が終わった後もいつも通りに図書室に通い、いつも通りに景色を眺め、いつもどおりに勉強した。
雪は白いイメージがあるが、人の生活圏でそのイメージ通りに在れるのは降ったその瞬間だけで、一晩も経てば車に踏み潰され、道路の砂が巻き上げられ、履き潰されたスニーカーのように茶色に薄汚れてしまう。
そんな美しくもなんともない景色でも、「意外とそんなもんだよね」と笑いながら清水さんと見ると、なんとも楽しく、愛しく見える。
二次試験を終え、合格発表を待つそわそわとせわしない感覚がクラスを満たす中で行なわれた卒業式の日の空は、宇宙に向かって高く抜けていくような青が若人の門出を爽

やかに祝う穏やかな天気だった。
式が終わり、少しの時間の隙間で図書室に集まった僕らは
「もうこともおさらばだね」
という清水さんの言葉とともに今までの日々を惜しんだ。
「大学の合格発表はこれからだから、清水さんが東京に来られるかわからないのが心配だな」
「自分の心配はいいの？」
「どうせ受かってる」
「イヤミだねー」
こんな軽口も、ここでは今日が最後だ。
思い返せばいろいろあった。僕たちがぶつかって、かつ僕が口を滑らせたのがきっかけで、僕は清水さんのエゴに救われた。図書室の窓が見せる四季の移ろいに心を動かされるようになった。変わることが、期待することが、楽しいと思えるようになった。
「祝賀会しようよ」
「私が落ちてたらどうするの？」
「……来年分を祝おう」
「浪人前提かぁー」
清水さんが大げさに肩を落とした。
「落ちないよ。僕が結構教えたんだし」
「だといいなぁ。じゃあ日付決めよっか」
そうして決めたのが三月十二日。この街の中心地の駅前に、十三時。
「じゃあ、また」
そう言って図書室を出ようとすると、
「待って。連絡先交換しよう」
と跳ねるような声で告げる清水さんに呼び止められた。
「あ、うん」
唐突な提案に感情が追いつかず力のない返事をした僕に、
「素っ気ないなぁ」
と彼女は笑った。
お互いスマートフォンを取り出し、登録の準備をし始める。
「人間、本当に嬉しいことを前にすると意外となにも反応できないものだよ」
「そういうわりに口の回転は相変わらずご立派で」
「褒め言葉？　ありがとう」
「宮地くん、国語赤点取ったことない？」
「残念ながら優秀で。どう、できた？」
「できたと思う。今何か送るね」
清水さんが文字を打ち終わったと同時に僕のスマートフォンの通知音が響き、チャット画面には「東京で待ってろ！」とのありがたい言葉が表示されていた。二人で顔を見合わせて笑った。

少し高度の低い太陽が、薄く浅く、柔らかい光で図書室を照らしている。

「じゃあそろそろ帰ろうか。卒業おめでとう」

「おめでとう」

乾杯の合図かのようにお互いの卒業証書をカツンとぶつけて図書室を後にした。

東北の三月はまだまだ冬の気配が強い。春の兆しを時折風が運んでくるものの、地面から足元を伝って忍び寄る寒さは人々からコートを手放させない。

約束の日付に約束の場所。どうやら五分前に着く必要はなかったらしい。やはり今日も清水さんは遅れて来るようだ。今日ばかりは時間通りに来てくれないものかと呆れている。

突如吹き抜けた風に身震いし、着込んだ衣服の隙間をどこかから見つけて入り込んでくる冷気にうんざりしながらマフラーを巻き直した。

冷たさはやがて痛みに変わり、あらゆる身体の末端が悲鳴を上げた。肩をすぼめ、手をごしごしとこすり、コートのポケットに戻した。

気を紛らわせるように街を見回すと、春休みの学生たちが寒さすらも楽しいという風に笑いながら小走りで駆ける姿と、わずらわしい寒さに身体を縮こまらせながら早足で過ぎる大人の姿が対照的だった。

痛みに耐えかね、遅刻してくる方が悪いのだと集合場所から離れ駅構内をぶらついたが、見慣れた駅で潰せる時間など高が知れており、数十分もすればまた待ち合わせの場所に戻っていた。

それからまた少し待ち、痺れを切らしてスマートフォンを取り出すと約束の時間から二時間が過ぎていた。

苛立ちの陰から臓腑を凍らせるような不安が押し寄せてきて、清水さんとのチャットに「まだ?」とだけ打って送った。

着信音が響いた。画面には煌々と彼女の名前が映し出されている。

耳に当てると、そこに聞き慣れた声はなく、暗澹を煮詰めた男の声だけがあった。

「宮地くんですね。清水翔子の父です。翔子は先程トラックに轢かれて亡くなりました。見るに堪えない姿ですが、顔だけは綺麗なままで……」

文芸思潮新人賞最優秀賞　受賞の言葉　蒼木　緑

「他者に訴えたい切実なもの」

「なにか一つ心に残るもの」

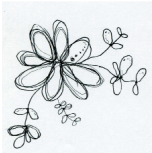
選考基準のこれらの言葉が、物語を紡ぐことに対する私の姿勢を決めました。

文章に物語を乗せる術を知らない私が誰かの心を動かすにはどうすればよいか、私の書きたい理由、書く意味は何かを考え、思い至ったのは己の弱さに向き合うことでした。

人は、日々を恙無く生きるため、積み重なる悲哀や恐怖等の負の感情を曖昧の中に隠して傷を受けないようにしていると感じます。実際、必ずしもそれと対峙する必要はありません。

しかし、私は物事に向き合う覚悟の不足から来る自身の停滞と、変化の必要性を感じていました。であれば、日常に求められる清さの奥で淀む、普段無かったことにしている醜さや未熟さを形にすることは私が物語を書く意味となり、またそれを許容する懐が文学にはあると信じました。

このような賞を頂けたことは身に余る光栄です。心より感謝申し上げます。



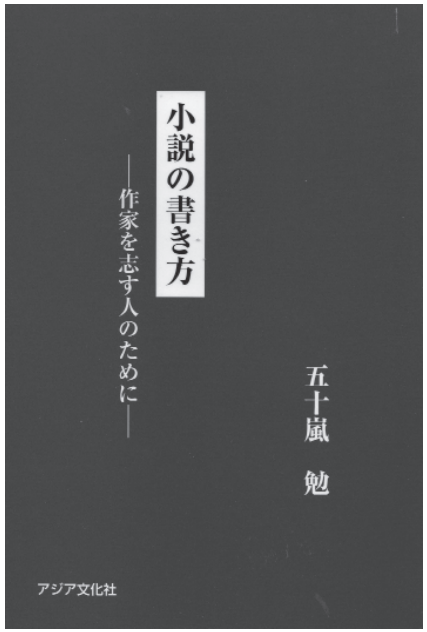
蒼木　緑

あおき　みどり

1997 岩手県盛岡市矢巾町生まれ

21 東北大学文学部卒業

23 東北大学文学研究科卒業



1000 円送料共　注文はアジア文化社まで

第４回
文芸思潮 新人賞
優秀賞

今日は生きます、でも明日は死にます

加藤 拓

数多の管につながり、真っ白い布に包まれ、縮こまるような姿で横たわる赤子を、彼は見ていた。白衣を着た人間が、隣で何か言葉を発している。けれども、彼はただその赤子に繋がれた管の本数を丁寧に数えることにのみ集中していた。

一本、二本、三本と……。

そしてそうやってもう少しで十本になる、その最後の一本を何としても見つけようと、それさえあればなにか変わるんじゃないかと、あと一本がどこかにないかと、ずっと探していた。

「これからのことを相談しましょう」

真っ白い部屋にて丸椅子に座った彼に、白衣を着た人間が静かに語りかけていた。

「このままずっとＮＩＣＵ（新生児集中治療室）というわけにはいかないと思います。申し上げにくいですが、今後の回復はほとんど望めません。このままずっとＮＩＣＵで、そうしてそのまま痛みと戦うだけになります。ですから、どうするかについては、私たちもしっかりサポートいたしますので、ご家族ともよくお話になってください」

「何か相談したいことあれば何でもお話になってください」

「あの……」

「はい」

「子どもは……」

「ええ、何でも聞いていいんですよ。何ですか？」

懸命に何かを聞こうと、そして質問しようとしても、どんな言葉も、何もかも、今の事態を何も正しく表していないように思え、何度も何度も言葉を出そうとしたにもかかわらず、彼はただ黙するしかなかった。

長い沈黙の後、「今日はもうお休みになられたほうがいいですよ。ね、さあもう帰りましょうね」と、憐憫を含んだ声をかけられると同時に、スマホが震えた。

その振動するものをしばらく見つめ、そうして白衣を着た人間に視線を向けた。

「どうぞ」

その言葉で初めて振動するものが何か分かったかのように、電話をとった。

コンペ、クライアント、選考、おめでとう、追加タスク、FitGap 分析、要件定義、明日、会社内で。

そんな断片的な言葉が耳に入ってくるたびに、何か固いものが感じられる気がして、確かなものを獲得できたような感じで、電話の後、はっきりと目の前の医師に伝えた。

「一週間待ってください。妻の心も落ち着いたうえで相談し、今後のことを決めます。ご迷惑おかけしますが、よろしくお願いいたします」

彼はその夜、寝床に入り、ＮＩＣＵの子どもの姿を思い出していた。

ピッピッと機械音が流れて、真っ白い保育器に赤土色の生物が、幾本ものチューブにつながれ、かすかな息をしている。

病気の説明の回復の見込みなしという言葉。

どうしてあの時、あの一瞬、自信のようなものを感じ、そうしてまた一週間という区切りを当然のことのように言ってしまったのだろうか。

時計の音が耳に響き、夜、あの子と同じように体を縮こめて、ベッドに横たわり眼を閉じ、じっと繰り返し考えた。生きるという行為の定義は何なのだろうか。何をもって生きているといえるのだろう。

ヒトは成長しなければ生きたといえないのか、ヒトは誰かと交信しないと生きていないのか、ヒトは何日間生きれば死んだことになるのか。誰が何をもって生きるとか死ぬとか、生きているとか死んでいるとか決めるのか。

そして最後、どうしても、何とか考えまいとしても、やっぱり、思ってしまった。

何かが悪かったんじゃなかったのか、どこかで失敗したんじゃないのか、それとも、どうしてこんな運が悪いのだろうかって。あの子が失敗、あの子が負い目、あの子が罪のように、生まれてきたことが、生んだことが私たちの罪かのように。

何も整理されておらず、今後のスケジュールもタスクも

決められていない、ただ混乱したままの状態が耐え切れず、吐き気がするようで、それでもどうしようもなく、ぐるぐると同じことを考えて、そしていつの間にか眠りに落ちていた。

そしてあと、六日。

妻が、目覚めた。

「子どもは？」

まだ意識朦朧としながらも彼女は、はっきりとそう言葉に出した。起きてすぐ、第一声で、彼の眼をじっと見て、真剣に。

あらかじめ医師と示し合わせた嘘が、饒舌に言葉となって口からでていった。

「元気だから、もう一日、もう一日ゆっくり休んだほうがいい」

「どこ、じゃあどこ、ねえどこにいるの、一目でいいから」

口は動く。

「今、他のとこにおる」

「ううん、なんともない」

「違う、ただ大事とってね」

「明日ぐらいかな。その時には会えるから」

「ね、今日は休もう、今は」

彼女の顔が怖かった。

なかば悟っているかのような顔。そしてそれはやがて、それでも彼の言葉をなんとしても信じたい顔になっていった。そうして彼女は、新しく入れられた麻酔の効果により、また眠りに落ちていった。

彼はことあるごとに、あの部屋のことを考えていた。

ＮＩＣＵの子ども、何本もの管につながれたまま、心電図の音が繰り返し聴こえた。その音に自分の心臓の音が重なった。そうしてそれでなぜか安心した。

ああ、私は生きているのだから、あの子もまた生きている。こうやって二人同じリズムを刻んで生きている。なのに、どうして、何かを求めるのか。何が悪かったのか。

あの苦しそうな顔。

苦しめているのは私なのか。無理強いしているのか。

違う、耐えて、耐えて、生きているのではないか。自分だってそうであるように。それでも、やっぱり、我儘なのか。

あと五日。

その日、地方から上京してきた妻の両親に、事実を伝えた。そして落胆した彼らを彼は慰めていた。それら無意味な励ましの言葉の数々が、不思議とぺらぺらと口からでた。

「お母さん、大丈夫だから。あの子も一生懸命生きているから」

「お母さん、妻の容体は問題なくてよかったです」

そんな言葉を投げかけるたびに、彼はなぜか何か確かなものを感じ、心が安定していくのを感じた。そうして、次々と言葉を発し、その終いに妻の両親が泣きながら、「あなたが一番つらいのにごめんね、ごめんね」って返した姿に、満足感を得たのだった。

ただし夜、一人で眠っていると、また不安が襲ってきた。その分、昼間の安らぎを強く意識した。あれは、何故だったのか。何かあるべき自分を演じられた気がする。そうすると、どこかに今の自分たちのモデルケースがあるのでは？

判断するためのロジックだったり、論点整理するためのフレームワークだったり、そのためのマインドセットだったり？

そんな仕事で付いた癖のような思考をするものの、やはり思うのだ。でも、どこにも前例や基準がない時は、参照できない時は、比較できない時は、どの答えが正しいのか誰も決められない時は？

今日もまた何も判断できぬまま過ぎ去っていった。

あと、四日。

医師の勧めに従い、妻に、彼は告白をした。

ただ冷静に冷静にと、事実を伝えたはずだった。

その言葉が伝わるとともに、彼女は泣き出した。振り絞るような、腹の底から響く、声ともならない音が聞こえてきた。それは、獣のような、今まで聞いたことのない音だった。その反応に彼も混乱した。

だから彼は懸命に慰めた。誰かが悲しみを抱えていて、それを慰める。そのモデルに則って、自然に。

「やめて。や、やめて。お、お願いだから」

嗚咽しながら、突然、そんな言葉が強い語気で返ってきた。

それでも、何とか慰めようとしていると、次はコップが飛んできた。そんなことをする彼女ではなかったのに。そして、目の前には泣きはらした目で、狂ったように彼をにらむ女がいた。

でも、なぜか、そんな振る舞いをされればされるほど、冷静に、冷静になろうとする、なろうとできると、そこに何かやりがいを感じたのだった。

そうやって調和をこれまでとってきたのだから。

どっちかが、落ち込んでいる時は、どっちかがひょうきんで、どっちかが、悲しそうな時は、どっちかが嬉しく。そうやってバランスをとってきたのだから。

そうすることで、不思議に、自分を取り戻せるのではないかと期待し、そのためにただ慰みの言葉を次々とにかけながら、ようやく平安を取り戻せそうと。その一方で目の前の女はどんどん言葉を荒げ、暴れ、叫んだ。

彼女の母親は、そんな様をながめていた。「あなたもつらかったね」という昨日の優しい言葉を忘れたように、何の感慨もない目で彼を見つめ、そして、さよならも言わずに病室を出ていった。

間に入った看護師からの、「大丈夫ですから」という言葉、そういう慰めの言葉もまた違う意味に捉われて、また不安になっていくようだった。

彼は、夫として妻を支えたのに、そうあろうとしたのに、じゃあ何になればよかったのか。どうすればよかったのか。帰りにＮＩＣＵの子どものもとを訪れた。

今日もまたここに有り続けている。何も言わずにただここで、その子は。

あと、三日。

彼は、仕事に復帰した。

悲しさを抱えて、それでも生きている。そんな自分の姿にすがろうとしたのかもしれない。

長年付き合いがあり、もうビジネスをこえた関係もあるクライアントからの「大丈夫ですか？」という言葉に、「ご心配かけて」という言葉を何度も発した。

「命の大切さを学ばさせていただきました」

「妻も無事で、私は子の命を背負っていきたいと思っています」

それもあれも、どこか何かで読んだり見たりしたような姿や言葉だった。ただそのようにふるまうことで、踏ん切りをつけた自分を感じられ、それが心地良かった。

仕事中、何度も妻から電話があった。

受話器越しに、泣き叫んでいる声が聞こえ、その度に慰め、スマホから漏れるかな切り声に周りは気まずくなり、それでも何かの映画で見た表情を彼は作って、また何かの小説で読んだ言葉を彼は発して、そして電車に乗るからと逃げるように切った。

「あなたは産んでないからわからないのよ」

「胸だって張らないでしょ」

「子どもって意識がないのよ」

「またとか、これからとか、もうないのよ」

「ずっと、ずっと不妊治療して、頑張ってこれなのよ」

「次なんてない。あの子は、もう、もう二度と生まれてこないのよ」

留守電のピーッとした音が鳴って、その言葉たちが続いていく。

何度も、何度も、泣き声とともに空気の震えが耳をとおして聴こえてきた。

夜、寝静まった病室で妻の寝顔をみた。

包むようになりたい、どうにかして、どうにかして保つ必要がある。家庭を壊すのはだめだから。守るのだから。自分がちゃんとしなければ、妻がダメになっている今、自分がしっかりしなければ、彼はしきりにそのことを考えていた。

バランスをとること、調和をとること、そうやって生きてきたのだから。

あと、二日。

今日も何度も電話が鳴った。

「あなたはいつも自分のことを言わない。そうやって客観的にあるようにして自分を出さない」

「誰かが苦しんでいることを励ますことで安定を得ようとしている」

「それがどれだけ自分勝手かをわかっていない。結局自分にしか興味がないのよ」

「子どもができれば、もしかしたら変わるって、変わるんじゃないかって……」

「どうして？」

「なんでこんな時に、仕事できるの？」

「違う、そんな慰めがほしいんじゃないって言ってるの、謝ってほしくなんかもないの」

「違う、違う。期待していない。言葉がほしいんじゃないの」

一方的に切られ、そうしてまたしばらくして、鳴る。

「なぜよ、なぜなのよ。一週間ってどういうつもりよ」

「そうやって期限を決めれば何か選べるの？」

そしてまた沈黙がはじまり、そのあとぽつりと、聴こえた。

「ごめん、ごめんね。私が、悪かったんだわ、きっと」

いっそう彼は、考えた。自分だけはちゃんとしなくちゃと、でも、でもちゃんとするってどういうことなんだろうか。

ＰＣ画面には、ある一定のロジックに従った、パワポの一枚紙が表示されていた。

一つの論点にFocusされ、いくつかの案がメリット・デメリットとともに記載されていた。

スタートからゴールに最短でいくために必要十分な材料

で、常に答えを意識した行動で、目的と行為が一つの線につながっていて、余分なものなんて何もない。きれいに一枚の絵に描いていく。気持ち悪さのない、整然としたパズルみたいで。

そうやってその晩、病室の妻のベッドのそばでクライアントに提出するプレゼン資料を作っていて、ふと何が何だかわからなくなっていった。

シンメトリーの効いたわかりやすいデザインは何故こんなに合理的に見えるのだろうか。どうして生産性、効率性を追求しなければいけないのか。

「アウトソーシングし空いた人材を有効活用」「リスキリングした上で適材適所に配置」そんなお題目によって、今いる場所から離された人が行くところはどこなのだろうか。

何があるべきなのか、どうすべきなのか。

もはやわからなくなって、図形の定義、カラールールの規定、凡例の提示、四捨五入の徹底、マイルストーンの設定、そんなものに、そんなものに、そうすべきことに。もう信じられなくなって、そして信じたくなくなっていった。

あと、一日。

彼は、夢を見た。

「ゆうちゃんは、あんたより小さいんだから、我慢して」

「身体だって違うんだから、助けてあげて」

彼が小さい時の家庭の日常だった。

彼は、いつも「お兄ちゃん」であり、いつも「健常者」だった。その役割から逸脱すると叱られ、その役割に従えば褒められた。

大人に求められるように振る舞うことが染み付き、彼はどこに行っても、ただ大人にとって感じのいい子どもだった。そうして、そうやって人間関係の役割に応じて規定するのを他人にも当てはめるようになっていった。

何かの折に、母が言った。

「お母さんが出て行ったら困るでしょ」

その癖で、冗談めかして彼は返した。

「誰も洗濯してくれんくなるからあかんわ」

「他にはないの？」

母は笑っていた。

「ゆうちゃんの世話やご飯、掃除も母さんやな」

「他には？」

「他は、なんもない。そんだけ、そんだけや」

悪びれもせず、彼も笑いながら母に答えた。

「そう」

そう言ってまた笑うと、母は出て行った。それから夕暮れ過ぎになっても、母は帰ってこなかった。

「お兄ちゃんがあんなこと言ったから怒ったんやないか」

夕餉の時間を過ぎても帰ってこないことをゆうちゃんが非難した。

その言葉に若干の焦燥を感じながらも、「アホ、冗談やないか」って口から強がりを言った。それでも不安、後悔、そしてそっと母を探しに家を出た。

暮れかけの道。

スーパーの店内を探したり、クリーニング屋をのぞいたり、コンビニに行ったり、思い当たる場所全てに行ってみた。それでも彼は母を見つけることはできなかった。

いつの間にか結局ただあてもなく彷徨っているだけだった。ふらふらと。徐々に暗くなっていく空があった。空き地沿いの道をぽつねんと歩いていた。

その時だった。

母が空き地の向こうから籠にスーパーの袋を詰め込んで、自転車に乗ってむかってくる姿を見た。そして彼を見つけると、何事もなかったように、明るく声をかけたのだ。

「どうしたん、こんなとこで。なにしてんの？」

そのあっけらかんとした声が、許せなかった。

こんなに心配したのに、一生懸命探したのに。

きっと母をにらみ、そしてこのままどこまでも一人、一人で生きていくって強く思った。

母の言葉に返すこともせず、その横を通り過ぎ、真っすぐどんどん歩いた。一心に地面を見つめて、強くありたいと思った。何かに頼らずに、誰にも弱音を吐かず、真っすぐ生きていくって思った。

その時、暖かい手が後ろから彼をしっかりと抱きしめた。

「ごめんね、ごめん」

何度も言葉が聴こえてきた。それから首筋に母の涙が感じられ、それは滴となってTシャツの隙間から背中に流れ落ちていった。

彼も、いつしか泣いていた。

「母さん、母さん」

意味のわからない断片的な言葉がぽろぽろとこぼれた。

「どうして」

「何で」

「俺だって」

「ごめん、ごめんなさい」

そう何度も言葉を振り絞り、その度に、母は、ひたすら「ごめん、ごめんね」と、言い続けていた。

広告承ります

文芸思潮への広告ご希望は広告部まで御連絡ください。　1／4四千円

☎〇三・五七〇六・七八四七

目覚めると、ベッドに彼は横たわっていた。
点滴につながれ、寝かされていた。隣のベッドには妻が眠っていた。
しばらくその寝顔を見つめた。苦悩のような皺が記憶されていた。
そうして、わかったような気がした。
「ごめん、ごめんね」
心でその言葉を言いながら、いつしか彼は泣いていた。
やがて彼のむせるような泣き声で、眠りから覚めた妻は、びっくりしたように彼を見て、いつの間にか、同じように泣いていた。
そしてお互い言葉を発せずに、ただ泣いて、近付き、抱きしめ合った。
彼らはそうやって、二人ずっと泣きながら、その夜を過ごした。

その日。
約束の一週間を過ぎたその日は、ただ彼らのためだけにあった。
そして二人が見つめる先にはＮＩＣＵの子ども。何年間もの不妊治療の末に授かった、彼らの赤ちゃんがいた。

苦しそうな息。
現代の治療技術をもってしても、もうこれ以上生きられない生命。生まれてからずっと痛みに耐えてきた身体。
自分たちのエゴなのか。何度も反復した質問に、結局答えはでず、宙ぶらりんなまま、その幼い生命が尽きようとしていた。成り行きにまかせ、ただそのままに、でも一生懸命に生きていた。

一週間の期限を過ぎてからは、看護師の目は日々強まり、医師からは、はっきりと言われた。
「もう回復のめどは、ありません。このままＮＩＣＵで処置しても対応が難しい。以前相談させていただいた通り、ご判断ください」
ただ何の判断かは最後まで明言はされなかった。
彼らはそう言われながら、判断するのが中々できなかった。そうやって決断しないのは、逃げているのだろうかと自問した。
わからない。
ただ何もしない、何も決めない、そういう選択もあってもいいんじゃないかって、思っていた。
彼らは、よく話していたことがある。夜、暗がりの寝室

で静かに。
みんなはいつも、はっきりと判断できているのだろうかって。
今日は生きます、でも明日は死にますからって。
そうやってはっきりと決めながら生きていることができているのかって。
彼らは、少なくともそうすることができなかった。
今までの人生を振り返っても、死にたいって思っても死ぬことができなくて、生きたいって思っても、そんなに一生懸命に生きられなくて、中途半端に、ずるずると、なんとなく、そんな生き方をしてきたように感じ、ただ、ただそれでも、それで、それでいいんじゃないかって……。

看護師が抱いてあげてと、そばで何度も繰り返していた。
「最期に母親のぬくもりを」という訛えたような言葉が、何度も何度も発せられた。あたかもそれが、当然皆、どんな母親でも、そうしてきたかのように、そうすべきかのように。
繰り返されるその言葉を、彼の妻はひたすらに無視していた。
そうしてただ、眼の前のベッドに寝かされた子どもを、じっと見つめていた。

看護師は助けを求めるように、今度は彼を見つめた。しかし彼は、けっしてその眼を見返さなかった。妻と同じように目の前の子どもをただ見つめていた。一瞬も目を離さずに、苦しんでいるその子を、その苦しみを、見逃さないように。
突然、彼の妻はそっと指でその子の顔に触れた。赤黒く紅潮し、眼はひらかれず、痛みに耐える、悩ましい偉大な顔に。
そして、優しくゆっくりとなぞり、その後、子どもの手に触れた。
その時、子どもの手はそれを静かに握ろうとしたように見え、妻は、今日初めて彼を見、驚いたような顔をし、それから静かに笑った。
彼は、その二つの指を、恐る恐るそっと包むように、触った。
暖かかった。
その暖かさが、掌の中にゆっくりと、確かに広がっていった。

文芸思潮新人賞 優秀賞 受賞の言葉　加藤　拓

審査員の皆様および、購読者の皆様、作品を読んでいただきありがとうございました。

今回の受賞も糧にし、生きるということのどうしようもなさや、それでも諦めず、もがきあがく様を、今後も文章を通し表現していく所存です。

賞の授与および、雑誌掲載の機会をいただき、関係者各位および、購読者の皆様、繰り返し感謝致します。

加藤　拓

かとう　たく

1987 福岡県生まれ

東京都在住

大学卒業後、通信機器会社の海外マーケティングに従事

現在は主に通信・コマース系の業界向けのコンサル会社にて勤務中

第4回
文芸思潮 新人賞
優秀賞

ホワイト・ライ

小幡洸貴

F was a hook, originally.
Fはフックだった、元々。

一　嘘を愛する妻

妻は嘘を愛する人だった。妻は美しい人だった。
西洋の血、金髪青眼。キメ細かな白肌。濃い眉は筆先のよう。高い鼻。ハート型の唇……ぷっくりした唇、嘘つく舌先は魔法の杖。
物事が一点に向けて収束するように、僕が妻の嘘を問い詰めた夜が別れの前夜だった事は、完全な偶然だったのか？

離婚届。妻から僕に手渡しがあった。
ある春の夜。背の低いダイニングテーブルの上で離婚届に判が押された。
「ニャー」
妻の膝上に丸まる猫、グレイスが鳴いた。ロシアンブルーという猫種で、目は妻と同じく青い。毛色は銀チックな灰色で、妻のブロンドの髪と金銀の対称となり、まさにグレイス、妻に似合う猫だ。
離婚について、僕達は一夜にして千の物語を語るように、あれこれと話し合った。結果として、離婚は成立した。
この際だ、聞いてしまえ、と思って僕は妻にこう尋ねた。
「どうして僕達の子供を中絶することに決めたんだ？」
リビングの黄色の明かりが僕達の関係を儚く照らしていた。
秋の月のような明かり。
妻は出産のために酷く衰弱した身体を、自宅でゆっくり休めていた時期で、食欲が戻り、言葉の語尾なんかも整ってきた頃だった。
妻は木製の椅子にきっちりと座って、僕に離婚を申し渡した。衰弱した妻に寄り添い、守護神のように気を張っていた猫のグレイスも、今では心地良さそうに妻の膝の上で甘えている。
「だって重いショオガイがあるってお医者さんが言ってたわ。私はそんな子を育てレル自信なんてないもの」
グレイスは妻に撫でなれ、喉をゴロゴロと鳴らしている。
――嘘だ、と僕は思った。僕はこう言った。
「ずっと不思議だった。君よりも、どうして……君のお義父さんとお母さんが出産に猛反対したか、僕から見れば、君は二人の言いたいことを僕に言っていただけだ」
「そんなことないわ。私の意志でオロすことに決めたのよ」
黄色の明かりの許で彼女を見つめた。
肩まで伸びた綺麗な金髪の毛先、髪は細く根本に栗色の髪。久しく染めてもいない茶金色のプリン髪がよく似合うのは、彼女が西洋の血を引くからではなく、嘘を愛する僕の妻が美しいからだ。
僕はリビングに半ば放り投げてある仕事用の鞄を手に取った。職場で殆ど使わないこの黒ナイロン製の鞄を僕が常に持ち歩くのは、中身を家に残したくないから。
中からクリアファイルを取り出し、挟まれていた数枚の書類を離婚届けの上に重ねた。
「調査報告書？　あの子がアナタとの子じゃないと疑っていルわけ？」
「そのはずだった。でも君は浮気なんてしてなかった」
「どういう…？」
「二転三転あって、雇った探偵に君のお義父さんとお母さんについて調べてもらった」
「へぇ」
「君は僕と出逢った頃、こう説明したのを憶えてる？」
「どういう説明？」
「君は今のお母さんと、何処かのオランダ人との間の子供で――」
「そう、その通り」
「最後まで聞いてくれ」
「そう」
「君が物心を覚える前に、お母さんは今のお義父さんと再婚した。純日本人の夫婦に、金髪青眼の君が育てられた」
「その通り」
「だから君の日本語は片言で、オランダ語の一つも憶えちゃいない」

「えぇ、そう」
「本当にその通り？」
「えぇ」
「本当に？」
「えぇ」
「……報告書は後で読んでくれればいい。この報告書にはこう書いてある。君のお母さんにはオランダ人の交際相手なんて――」
「ちょっと待ってよ！」と妻は声を挙げた。
「――何を調べたか知ラないけど、私はこれ、ゼッタイに読まないかラ！　私は何の嘘もついてない！　いいから私と早くリ婚して！」
　妻は手に持った書類の束を、カーペットの敷かれた床へ投げた。僕を挑発する行為、離婚を勧める行為。白い紙は宙で逆上がり、別れて、ひらひらと、僕の眼前に散った。
「君はこの期に及んで、まだ嘘ばかりつくんだな……君は何処でその金髪青眼と片言の日本語を手に入れたんだ――」

――調査報告書にはこう書かれていた。
調査項目　《指摘項目調査》
調査対象者　星出瑠奈（ほしでるな）、中谷雅功　中谷麻美
《報告》

　ご指摘の出産に強硬に反対する特別な理由というものは、残念ながら、聞き込み調査や張り込み調査では分かりませんでした。
　前回の浮気調査の結論を踏まえ、出産を拒んだ理由が他の男性との関係性である可能性は低いと思われます。
●母の中谷麻美について。
　興味深い発見として、星出瑠奈の実母である中谷麻美の過去には、ご依頼者様のお話しされたオランダ人の実父の痕跡が全くありませんでした。
　夫の中谷雅功との結婚は、中谷麻美が十九歳の時で、疑いなく初婚であり、高校から大学までの期間を実家で暮らしていることから、結婚以前に誰かと事実婚の関係にあったこともありません――
「――もうどの途（みち）、私達はお終いなのよ！」
　妻はこの一言だけ、流暢に叫んだ。
　書類の束はひらひらとカーペットに落ちた。
　僕にも、僕達がお終いなのは分かっていた。明確な分岐点があったからだ。
　僕達の子供がある産科医の許（もと）で死んだ時、僕にも妻にも、この結婚生活は終わりを迎えることが分かっていた。
　話すことが途端になくなってしまって、僕は夜空を見上げるように、僕達の頭上に光る黄色い明かりを見つめた。

　秋の月のように濃い黄色で、静かな明かり。そんな明かりの許で、ゴロゴロと猫のグレイスが喉を鳴らしている。
　ふと今夜は春の夜だと言うのに、明日からは冬のように思えた。
「君が本当に好きなのは猫のグレイスと嘘だけだ」
　僕は最後にそう言ってやった。何もかもが嘘で固められた一夜だったが、僕は結局、妻の真相に迫ることは出来なかった。
――妻は一体何者なのか。
　これが僕の知りたかった真相だった。
　とにかく、妻から手渡された離婚届には必要事項が全て記入され、僕の判まで揃った状態で、明日の提出のために机の上に置かれた。

二　希望の嘘

「ねぇ、何に落ち込んでいルの？」
　妻は七年前、電話口で僕に尋ねた。
「僕には未来も希望も無いことだよ」と僕は答えた。
「星出君のこと、誰もそんな風に思ってない。むしろあかルく振舞ってルじゃない――」
　僕は丁度、富山大学に退学届を提出したばかりで、校門前から妻と携帯で電話していた。
　偶然か運命か、妻が僕に電話を掛けてきたのだった。
　あと二十分もあれば、僕はきっと富山大学のキャンパスから富山大橋に辿り着き、不幸を嘆いて荒れ狂う神通川（じんづうがわ）に身を投げていただろう。
　もし死にたいと思う気持ちが精神的な暗闇で、人生から眼を閉じようとすることならば……この素直になれた妻との電話は、人生の瞬（まばた）きだった。
　僕は電話口でこう続けた。
「――いや、僕なんてクソくらえだ。僕は君のお義父さんに嫌われてる。教授から『研究室を辞めてくれ』って言われてたばかりだ」
「今、何処にいるの？　私、今日休みだカラ、ちょっと会って話せば、気が済むよ」
「君のお義父さんは……中谷教授は傲慢で人間的に歪（ゆが）んで、宇宙研究以外のことは何も出来ない嫌な奴だよ。それでもって――」
　僕は口にしかけた言葉を呑み込んだ。でも僕はきっと人間的に真っ直ぐだった。当時まだ交際相手だった妻にこう口にしてしまった。
「――瑠奈のことを死ぬほど愛してる。君のお義父さんは僕と、君の奪い合いをしてるんだ」
　キャンパスの校門前で僕は泣いていた。進路変更、と書いた退学理由が情けなくて。

「今日は……グスッ……瑠奈だけじゃなくて、誰にも会いたくないよ」

僕はキャンパスの校門前から急いで、富山大橋まで真っ直ぐな歩道を歩きだした。校門前にはチンチン電車やバスを待つ生徒達が列を為している。皆、泣きながら電話する僕を見ていた。

「じゃあ今日会わないから、電話だけしよ！　でもどこにいルの？」

「グスッ、それを言っちゃぁ、瑠奈はどうせ来るじゃないか」

「行かない行かない。ゼッタイに行かない。いつも――事言わないのに、今日ど――の？何があった――」

電話はどういう訳か途切れ途切れだった。

「――つまり私のオトォさんが酷いこと言った訳ね！」

「あぁ、そうだよ。僕に研究室を辞めてくれって。だから大学を辞めてやった。グスッ、でも一心に君を愛するがためだ！」

「私がオトォさんに――す。何を言ってるの！って！　そんなの――」

「もしもし？　聞こえる？　もしもし？」

「――とにかく、もしほんトォな――、オトォさ――許さないわ！」

そんな会話が五分程続いた。途切れ途切れの電話回線。

僕は自分のことで頭が一杯。妻は怒り心頭だった。

「大学院生程恵まれない存在はないよ。高い奨学金まで借りてポスドクの一つも見つけられない院生は山程いる。それに比べたら、僕はまだ良かった方だ。大学を辞めても、僕には瑠奈が――」

遂に電話を切る感謝の結びを僕が述べようとした時だった。

「良くないワ！」

ハッキリとした妻の叫び声が僕の横から聞こえた。

視線を向けてみると、妻は僕が歩く歩道の傍の道で、モスグリーンの軽自動車に乗り、運転席から窓を開けて僕を見つめていた。

青信号の少し手前でピタリと停まる妻の車。明るい金髪と青い目、ぷっくりしたハート型の唇を不満そうに窄めていた。

涙し、傷心中の僕を車に乗せることがどれ程難しいことだったか。

僕が躊躇う暇もないほどに、妻は上手くやった。

キャンパス前の道路は片側一車線の狭い道路で、後続の車は追い越しも出来ずに、十台以上が並び、往来する生徒達の眼を引く長蛇の車列が一瞬で出来ていた。

「なんて所で車を停めてるんだ！」

僕は正気に戻って、妻に叫んだ。妻は悪戯っ気溢れる顔

でニヤリと笑い（僕が愛した表情の一つだ）僕に叫んだ。

「そうよ！　いつまで待たせルつもり？」

僕は直ぐ歩道から降りて、妻の軽自動の助手席に乗った。

車を急いで発進させると思いきや、運転席に座る彼女は助手席に座った僕を抱き締めてくれた。驚いたが、僕は彼女の膨らんだ胸の中ですすり泣いた。学業だけに縋り付く院生も多い中、僕には少なくとも彼女が居た。

「後ろ詰まってるよ」

「この数秒だけ、皆、星出君のために待つとイイの。きっといいこともあルわよ。人生ワルいことばかりじゃない」

「そんなクリーシェは嘘なんだ」

「そんなことはないわ」

「僕の人生に何か希望があるって言われても何の確証も無い」

「星出君のミライに希望がないのも、確証なんてないじゃない――」

妻は大事な時に限って、短い言葉で僕を魅了する。

そう、あの時からだ。あの時も春だった。

明るい金髪と淡い青色の眼に、前向きで陽気な向日葵のような魂が視えて、妻の魔法の舌先に僕が心から惚れたのは。

「――スコォシでも前向きな嘘をついて生きルの。希望を持って」

妻は僕に『希望を持って生きろ』と言った。希望は前向きの嘘なんだから。

妻こそ僕の太陽だった。青い目は空を映し、艶やかな金髪はまるで陽の輝き。長く濡れた暗い暗闇から目を覚ますと、輝く太陽の笑顔が見えた。僕も『生きよう』と思った。希望の嘘を唱えて。

後に知ったことだが、妻が僕の居場所に見当を付けたのは、チンチン電車が発車する音が電話に紛れていたからで、電話が途切れ途切れだったのは、玄関の扉の音なんかの、妻が外に出たことを僕に悟らせないためだった。わざわざ機内モードを使って電話を途切れさせていた。

僕を探さない・会いにこない、というのも妻がついた嘘だった。

「ウィンカーもバレないように使わずに来たのよ！　この一本道の何処かにいルと思ってね！」

僕の妻、中谷瑠奈は魔法の舌先で僕の心に前向きな嘘・希望を植えた。育った前向きな嘘を信じる魂は、僕を彼女に惚れさせ、彼女自身を僕の希望と変え、僕と彼女を結婚

広告承ります
文芸思潮への広告ご希望は広告部まで御連絡ください。☎〇三・五七〇六・七八四七

させた。

――しかし今、

希望の嘘は潰え、愛の嘘も解けてしまい、離婚の結論に至った。

翌朝、妻は大きな家具なんかを除いて、本当に自分に必要なモノだけを持って独り、「サヨウナラ」も言わずに出て行った。

「ニャー」

猫のグレイスが彼女にとって必要なモノに含まれず、僕と一緒に我が家に捨てられていた。そんなことは有り得ない、と思った。

グレイスは妻が愛した猫だった。グレイスへの愛だけは、妻の真実だと信じていた。

僕はグレイスを抱き上げた。

「グレイス、やっぱり何かおかしいよ。瑠奈がお前を捨てて家を出る訳ないじゃないか」

妻はまた何か嘘をついている。

僕は一時間もしない内に、職場のドラッグストアに仕事を休む電話を掛け、シャワーを浴びて着替えを済ませ、調査報告書が入った仕事用の鞄だけを手に取って、春の陽光の許に出た。

――調査報告書にはこう書かれている。

●星出瑠奈の出生に関して。

義父である中谷雅功の聞き込み調査において、当時、富山大学で天文学の教授を務めていた中谷雅功には隠し子の噂が付きまとっていた、と興味深い証言がありました。彼が無戸籍児について懸命に調べていたことが、その根拠であるようです。

《結論》

今回の調査の結論と致しまして、以下のことが挙げられます。

●星出瑠奈は中谷雅功に拾われた無戸籍児の可能性がある。

●母の中谷麻美は離婚の経歴がなく、星出瑠奈の実父と言われていたオランダ人の存在は確認できない。

●母の中谷麻美の聞き込み調査においても、彼女自身が妊娠した事実は確認できず、星出瑠奈の実母としての可能性は低い。

●星出瑠奈の血統や出生については、全くの不明である。しかし、確認できる最初の記録、小学校を卒業した年から逆算すると、彼女の出生は二〇〇〇年前後だと考えられる。

三　嘘は原罪の発露

「やぁ、これこそ愛の思し召しだ！　さぁどうぞ」

妻の義父である中谷教授は快く僕を自宅へ迎え入れた。

中谷教授は宇宙構造の権威で富山天文学の父だ。

元来傲慢で、生徒達には強気の態度を取り、強かさを裏打ちする天文学の業績がある。紫綬褒章を二〇〇五年に受章。齢六十八にして未だ現役の富山大学の看板教授だ。

僕はこの教授が大嫌いだった。僕と妻を奪い合い、富山大学から僕に引導を渡したのが中谷教授だから。

「愛の思し召しとはどういう意味でしょう？　先生」

長身で細身、中谷教授の骨と皮だけの身体に輝く知性を思うと、一輪の枯れゆく黄金の花を思わされる。風に吹かれるようにフラフラと歩き、糸で操られる人形劇の人形のような所作。煙草の匂いを漂わせ、細い額に白髪がふわりと乗っている。

「星出君が今日、我が家を訪ねてくると思っていたんだ」

教授の邸宅、つまり妻の実家は、呉羽山の麓に建つ豪邸だ。洋式で青い瓦がよく映える美しい邸宅。

草花は春に芽吹き、木の葉が秋に落ちる自然美しい邸宅で、テラスからは列星近く、門前には朱華が満ち、山気が澄む月を眺める美しい庭もある。

「――この見事な邸宅は隕石の賜物だ」

そんな噂通り、宇宙から巨大で特別な隕石が一つ、呉羽山の頂上に堕ちたために、この大きな邸宅が建った。

当時富山大学で助教授を務めていた中谷教授によって、隕石について、ある天文学的結論が導き出された。西暦二〇〇〇年の節目を迎える年で、富山天文学の産声が挙がる年だった。

中谷教授の論文にはこう書かれている。

――地球人類以外の知的生命体が確認された。

飛来し墜落した隕石Ｊ９１４は、知的生命体が造った簡易的な宇宙船だと結論づけることが出来る――

（中略）

――隕石と共に発見された焦げた遺骸は、隕石に乗り込んだ知的生命体だと考えられる。大気圏に突入する際に、隕石型宇宙船の何らかの故障により、強烈な熱気が宇宙船に侵入、搭乗員を燃やしたのだろう。

この遺骸の調査によって、この知的生命体の遺伝子が人類と酷似していることが判明している。遺伝子の解析に依れば、この焼け焦げた遺骸は古く三万年前程のヨーロッパ系の遺伝子を最後に、我々人類とは枝分かれし、急激な遺伝子変異を繰り返した結果、今や我々人類とは別種と考えられる遺伝子を有している。

これこそ中谷教授が二千年に出した考古学的・天文学的マイルストーンである『中谷論文』の概要だ。

隕石墜落から二十年以上経った今、隕石内部に残された軌道修正用機械装置の解析が済み、中谷論文を機に、世界中の人々の認識が『宇宙人はいるかもしれない』から、『宇宙人は存在するが、まだ地球からは接触出来ない』に変わった。

隕石の岩石物質から、この隕石は宇宙の太陽系外から飛来していることが判明。この隕石をくり抜いて造られたと思われる宇宙船には、動力機関が備わっていないことも判明している。

僕と義父は暫く、近い将来、中谷教授の死後、天文学的な記念碑として保存されるであろう小さな書斎で、ソファに座って向かい合い、幾らか隕石落下当時の話をした。滔々と流れる豊かな泥流のような語り口で中谷教授は話した。

「あの宇宙船はなぁ……結局、二十年経った今でも、解析は済んでいるが実体の解明は殆ど進んどらん。星出君、例えば、もし宇宙船がある地点から、他の地点への移動を目的にしとるなら、軌道修正の装置と一緒に、動力の機械装置も必要だとは思わんか？　でもあの宇宙船には動力源が無い。まるで宇宙の巨人が地球に向かって、あの隕石を投げつけたみたいだ。びゅんと、ひと思いにね」

そうしている内に、義母である中谷麻美が僕達にコーヒーとお菓子を幾つか運んでくれた。

「今夜はゆっくりしていきなさいね」

ふくよかな身体と柔和な態度。義母はいつだってそうだ。彼女は陽気で、常にこの学者家庭に明るさをもたらしていた。

――お義母さんも人生に嘘を抱え込んでいる。

僕はどうしても彼女に疑いの目を向けざる得ない。中谷麻美は僕の妻の実母のはずだが、探偵の調査ではその結論は否定されている。

「夕ご飯がまだだったら、ウチで食べて行ってもいいんよ。実は昨日、沢山作り過ぎてね、お父さんったら最近じゃ殆ど食べないから、困っていたんよ。いっつも研究研究って、テラスに大きな望遠鏡を出して眺めてるの」

カチコチと時計が鳴る音を聞いて、義母はお呼びではないと気が付いて、慣れた足取りで書斎を後にした。

僕と義父はそれからも、宇宙について話し続けた。

「なぁに、あの『中谷論文』は私が書かなくても他の誰かが同じ結論を書いて、中谷論文の名前が違う名前になっただけだ。私は運良く呉羽山の麓の小さなアパートに住んでいて、一番最初にあの隕石を発見した天文学者だっただけだ」

義母が姿を現してから、僕の脳味噌の中は宇宙の会話どころじゃなかった。僕はどうしても不思議に思わずにいられなかった。この老夫婦が、どうして僕の子を……彼等の孫の出生を拒んだのか。妻が言った通り、たとえその赤子

が障害を負っていても。

霜はいずれ氷を張る。誰もを永遠に騙す完璧な嘘は、きっと存在しない。

僕はこの疑問を中谷教授に直接尋ねた。

「教授」

次の言葉が口を出るまでに少し間があったから、教授もただならぬ気配を察して、吸っていた煙草を灰皿に置いて、指を離した。

「どうして僕達の子供を殺したんですか？」

「……」

「教授は知ってらしたんですか？　僕達は昨夜離婚届けを書いたんです。今朝、もう瑠奈は居なかった」

「……」

「知ってたんですか？　僕達が昨夜に別れたことを」

「……」

「教授……瑠奈はここにいるんですか？」

答えが無いので、僕は妻にも見せた調査報告書を鞄から取り出し、中谷教授に見せた。枯れた花が頭（こうべ）を垂れるように、中谷教授は前屈みになって報告書を読んだ。

「失礼とは知りつつ、中絶を迫った教授と奥様を不思議に思って、探偵を雇って調べさせたんです」

「見事だな」と中谷教授はようやく口を開いた。

「これは……これは私の人生最大の秘密だ」

中谷教授はすくりとソファから立ち上がって、細身の長身を良く伸ばした。まるで既に秘密から解放されたかのように。

「星出君はキリスト教には明るいかね？」

「いいえ」

「そうかい、キリスト教には『原罪』という考え方がある。この社会には善良な人々ですら避けられぬ罪が染み入っている。そういう考え方だ。誰もが年を経れば悪行を重ねてしまう」

中谷教授は齢六十八だった。

「外に出て話しをしよう。いい具合に夜も降りた。私が造った自慢のテラスで一杯傾けよう。中谷家の秘密を……教えてあげよう――」

中谷教授はこう続けた。

「――嘘は原罪の発露だ。そう思ってくれれば助かるのだが」

四　離婚届の嘘

「私の娘は宇宙人だった。今夜宇宙に帰ることが、隕石が堕ちた二十三年前の夜から決まっていた――」

中谷教授は自慢のテラスで僕に全てを話してくれた。

淡い夜が辺りには降りていて、呉羽山を背にした立派な

テラスには、また立派な庭がある。
庭の中央に立つのは、風に揉まれ育ったクスノキの大木。
中谷教授の寝ぐせのような葉傘を開き、路上の外灯が実となって葉の下にぶら下がっていた。
教授はテラスと庭を分ける木の欄干に両肘を置いて組み、青い夜空を眺めた。もうあれから二十年以上経ったことを、列星に問いかけるように。
「――瑠奈は二千年に堕ちた隕石に乗って、宇宙の彼方からやって来た。隕石が堕ちて直ぐに宇宙船を独り出て、呉羽山を彷徨っていた。偶然、私が保護したんだ……私が書いた論文は大学院で読んだか？　結論はこうだ……焼け焦げた遺骸は古く三万年前程のヨーロッパ系遺伝子を最後に、我々人類とは枝分かれしている。急激な遺伝子変異を繰り返した結果、今や我々人類とは別種と考えられる遺伝子を有している……いいか、あの焼け焦げた遺骸と瑠奈は私達とは共通の祖先を有している。これは真実だ。三万年前に何かが起きた。これが何か分からんがね。結果、彼等の祖先は宇宙の何処かへ連れ去られ、違う惑星で……『宇宙人類』とでも呼ぼうか……これまで脈々と命を繋いできた」
妻は宇宙人類だった。
中谷教授が、隕石が堕ちた日に奇妙な無戸籍児を拾い、名付け、育てた。
ここまで分かっても、なお、分からないことがある。どうして愛を注いだ娘が産む子を、中谷教授の孫を、僕達の子を、障害だけを理由に、拒んだのか？
「一つだけ分からないことがあります――」と僕は言葉を継いだ。
「――教えて下さい。教授達はどうして僕達の子を殺したんです？」
教授は答えた。
「なぁ、星出君、種を分ける大きな要因に何があると思う？」
「種を分ける要因？」
「稔性。次世代の子を産めるかどうかだ。恐らく君と瑠奈は同種の人類よりも別種の人類だったんだ」
「変な言い回しですね。どういうことです？」
「……産科医が頭を悩ませていた。赤ちゃんの形態異常が酷くてね、頭が大きく腫れて、四肢が極端に短かった。産科医に『こんな赤子は初めて見た』と言われた時、思い出したよ。自分で書いた論文の結論を！　宇宙人類と地球人類……瑠奈の遺伝子は丁度、地球人類と宇宙人類の狭間にいて、数歩ほどだろうか、宇宙人類として進化しすぎていた……きっと……だから身に子を宿した。でもその子は恐らく生きて生まれて来なかった」
「だから僕達の子は障害を負って……」
「瑠奈も星出君の子を産むつもりだった。地球に残るつもりでね。でも子が……！　幸運にも無事産まれたとしても……生きては行けぬ子だと知ってから……見てられなかったよ……あの娘は宇宙に帰ることに決めた。星出君に嘘をついて」
「えっ」
妻はまた嘘をついていた。
「離婚届を渡したのも、全ては星出君のためだったんだよ。君に何も知らせぬまま……心置きなく別れて……全てを秘密にする嘘だった」
昨夜手渡された離婚届は、宇宙に帰る際に僕が心置きなく彼女と別れるための嘘だったのだ！
妻は離婚届の嘘で真実を覆い隠そうとしていた。
「君が赤子の将来を夢見ていたのを、瑠奈は良く知っていた」
中谷教授がそう言った時、妻の離婚届が……僕達の子の尊厳を守る嘘であったことに、僕はようやく気が付いた。
「――」
中谷教授は僕に囁くような声で、一言を添えた。何が彼の声を小さくしたのか、キザなセリフに対する一抹の恥ずかしさなのか、僕には分からない。でも僕の耳には、余りにもはっきり聞き取れた。
「妻は何処に居るんです？　教授！」
「隕石が堕ちた場所だよ。この呉羽山の頂上に迎えが来てるはずだ。今夜は夜空に惑星が並ぶ夜だ。恐らく瑠奈の惑星の人々は、惑星を乗り継いで地球に来るのかもしれんな」
僕はテラスの欄干から庭先へ飛び降りた。夜陰のクスノキの許を走り、呉羽山の頂上まで続く路上へ出た。もう中谷教授へ振り返ることもなかった。事態は一分一秒を争うのだ。
「さぁ、ゆきたまえ！」
中谷教授は傲慢に、気取った叫び声を挙げた。
「男に一度生まれれば、馬に汗して長城を出ん、だ！　脚を走らせ、この地球からも飛び出る覚悟で、愛した女を迎えに行け！」
僕は夜風のように走った。宇宙へ帰る妻の許へ。
背後から遠く掠れた声が聞こえた。中谷教授の奥様の声だ。
「どうして教えてしまったの？」
「聡明な人は現象を見て、深奥まで見抜くもんだ」
「あんなに瑠奈が秘密にしたがっていたのに」
北極星の高くまで吹きそうな強い夜風が、彼等の声をかき消してしまった。

五　真実

呉羽山の頂上に続く山道を少し逸れて、アスファルト、

柔らかい草を踏み、道の先を行くと、木々に囲まれた円状の広場がある。

『歌塚』、呉羽山の人々にそう呼ばれた広場だ。

人知れず二体の銅像と幾つかの歌碑が立っている。

旧富山県知事と富山交通の父、この二体の銅像は、二十三年前の隕石落下を唯一眼前で見た目撃者だ。

二十三年前……

……歌塚に二十三年前、直径五メートルもの隕石が宇宙から堕ちた。『クレハ隕石』と呼ばれる隕石だ。衝撃は辺りの木々を薙ぎ倒し、富山県民によって建てられた二体の銅像をも倒壊させた。富山交通の父、佐伯宗義像と、第三十九代富山県知事、中田幸吉像。倒れた二体の銅像はひび割れ、変形していた。何万光年と旅した隕石が地球の地表に衝突した際、酷い衝撃波が辺りを襲ったからだ。

地域の人々への被害は僅かだった。

山頂に隕石が堕ちた事が幸いした。強烈な衝撃波は空へ噴き、平面的に放たれ、呉羽山の山頂に建った家屋は残念ながら倒壊したが、呉羽山の麓には被害を及ぼさなかった。麓の家屋については、窓ガラスが幾枚か割れただけ。幸い、山頂で倒壊した家屋の住民も山を降りて外出中だった。

被害の少なさから、クレハ隕石は悲劇よりも奇跡や天意として人々には捉えられた。

人類が宇宙へ旅立つ天意天命であると。

今や銅像は修復され再度屹立し、歌塚の広場にはクレハ隕石の案内看板と、木柵に囲まれたクレーターが静かにあるだけだ。世間一般からは、隕石広場として知られる事になり、歌塚と呼ぶのは二千年以前から呉羽山に住む古い住民達だけだ……

……その暗い夜には眩しすぎる程の彩り溢れる灯りが、広場に満ちていた。僕は妻を探しに来て、その光景を目の当たりにした。

――運命か、天意か、それこそ愛の思し召しか。

宇宙船が呉羽山に着陸していた。

ロケットのような円筒形の金属製の乗りもの。先端だけがぐにゃりと斜めに曲がっている不思議な形の宇宙船だった。

闇を塗ったような山林の真夜中に、所謂、人工的な明かりと物質が、宿命を座して待つように広場の中央に位置していた。人気なく、清涼な春の夜が、呉羽山の森が、僕に囁きかけた気がした。

「これは世界の秘密……人生の無限の可能性……あなたのためにこの世界が造られた証拠」

そんな秘密の光景だった。

機体の中央からは外板を裏返した、入り口に繋がるスロープが地面に降ろされていた。無人のスロープ。

宇宙船の胴体には明かりが埋められ、夜のメリーゴーランドのように明るい。ここ二十年の若い木々が静かな夜に、喜色を発するように照らされていた。

呉羽山の不如帰が夜に鳴けば、この宇宙船はより切ない声で反響するだろう。そんな金属板で造られていた。柔らかい土の上に着地したスロープは、黒々とした機体への入り口に続いていた。

「瑠奈！　聞こえるか？　まだいるんだろ？　隠れていてもきっと見つける！　顔を見せてくれ！　こんな嘘に塗り固められた別れに満足なんてできないよ」

少しだけ間を置いて、金髪青眼の僕の妻が入り口から顔を出し、全身を露わにした。

妻は不思議な真白な宇宙服を着ていた。

それでも正真正銘、僕が愛した妻だった。

「どうしてここを知ってテルの？」

僕の妻はこう声を挙げた。

「とにかくアナタとは別れたはずよ！　そこから一歩も動かないで！　追って来ないで！　ねぇ、来ないでってば！　リ婚届は市役所に提出済みなんだカラ！　嘘だってついていない！」

「君は宇宙に帰る事に決めたんだろ？」

「おトォさんかラ聞いたのね――」

妻の問いが、僕の記憶の枝葉を揺らして、呉羽山を登る前、中谷教授と話していた事を逐一思い出させた――

中谷教授が吐いたキザなセリフはこうだった。

「――瑠奈は君を愛していた。これが真実だよ」

……真実の言葉は一生忘れる事など出来ないものだ。そして僕はこう信じている。人生は真実を試験する工程なのだと。

僕は胸を張って、妻に言った。

「お義父さんから全て聞いた。君の事も僕達の子の事も」

「あぁ、そう、でもおトォさんは嘘ばかリつく人だって知ラナいでしょ？」

そう言った妻の声は小鳥が飛び去るように儚かった。

「君は僕に嘘ばかりをついてきた。でも僕も君と同じように嘘を愛する人間になった」

僕は一歩一歩、スロープを登った。僕の緊張も妻の緊張も手に取るように分かった。僕は宇宙船の科学臭い匂いに引き込まれるように、スロープを歩き、妻が立つ機体の入り口に立った。

「さぁ帰ろう。グレイスが君を待っている」

「帰レナいわ！」

彼女は空色の目を逸らした。

「グレイスはアナタが面倒見てアゲテ」

妻は僕の身体を押し避けた。僕はスロープを後にして、無理やり、強引に宇宙船に乗り込んだ。

宇宙船の内部には白光が焚かれ、独自の宇宙服を着込んだ不思議な生命体が二体いた。側面から見た事で彼等の身体の構造をよく見て取る事ができた。

彼等はコックピットのようなモニターと光るボタンが支配する区画にいて、皮膚は青く、六本の肢体の内、四本で地面を掴み、残り二本でコックピットに所狭しと光るボタンやモニターを触っていた。胴は長く、後頭部が膨らんだように大きく、触覚があり、眼らしき黄色い水晶体が顔に四つある。

「駄目よ！　帰って！　グレイスの面倒はだレが見るの？」

「宇宙に帰るなんて僕は信じないぞ。あんなに好きだったグレイスを残していくなんて……どんな嘘も信じないからな！」

妻は怒っていたのか、声を更に張り上げた。

「残る訳には行かないわ、私の本当の親は故郷の星にいルンだカラ！　地球のリョォ親は私の本当の親じゃないのよ！」

真実は悲しい響きがした。

「本当のお父さんは私をかばって焼け焦げて死んでしまったわ！　お母さんは私の帰リを独リで待っていルの。さぁ、分かったラ早く宇宙船を降リテ。ここでサヨナラよ。地球に残るアナタにも両親にも、私はもう全く興味がないの！」

そして嘘はどことなく暖かい響きだった。

コックピットに居た宇宙人達がガチャガチャと騒ぎ始めた。

「グチャ・ガチャチャ・ゲーチャ・グチャグチャ」

「グアッチ・チャチャチャ・ゲーチ・グチャグチャ」

僕の耳にはこんな風にしか聞こえなかったが、彼等は慌てたように会話をしていた。僕が物珍し気に眺めていると、妻が

「いけナイ！」と声を挙げて僕を突き放した。

途端にウィーンと機械音。何かが作動した。地球の地面に降りたスロープが引き揚げられた。

「彼ラ、アナタを本気で惑星に連れて行くつもリよ！」

「僕は君と一緒にこの宇宙船を降りる！」

引き上げられたスロープは宇宙船の外板となって入り口が閉じられ、スロープは地球の土を付けたまま、機体の内板となった。

「ガチャガチャ・グーリッヒ・ゲチャ・グチャグチャ」

妻が凛とした口調で、宇宙の言葉を口にしたのを聞いた。

彼女が宇宙からやって来た事は真実だったのだ、と思わされた。

「ガッチャ・グワッチ・グーリッヒ！」

「グーリッヒ！」

機内の白光の許、二体の宇宙人が何かを声を揃えて言った。

僕達が乗った宇宙船に途轍もない振動に震えた。

出発するのだ、と僕は思った。

宇宙船の強靭で重厚な振動。振動の力強さは僕に新たな希望を植えさせた。僕は何の因果か運命の悪戯か、宇宙に旅立つのだ。

「あぁ……！　遂にグレイスをひとリで置いてきてしまったわ」

妻が横で頭を抱え、膝から崩れて、妻は泣き出してしまった。

妻の心根は優しい。それも僕が知る彼女の真実だろう。

宇宙船が地球の地面から離陸した事を僕も妻も感じた。宇宙船内部にはまだ窓は見えず、金属と機器類だけがある筒状の狭い空間だった。それでも強烈な加速を体感すると、怖ろし気な興奮が僕を襲った。

ふと、ガガーリンになった気がした。妻がグレイスを想って傍で泣き崩れているのを傍目に。

「大丈夫だよ、二人で何とか戻れる手段を探そうじゃないか」

宇宙船は直ぐに地球の成層圏を抜けて、宇宙船は宇宙へ旅立った。僕の身体も無重力に浮いた。

六　宇宙人類の詩

宇宙船の機内は三階に分かれていた。

一階は主にコックピットとトイレ。二階は恐らく宇宙人達の居住スペース、三階は妻の居住スペース。

妻の居住スペースだと分かったのは、四段の縦長の本棚が置いてあったからだ。

本棚を埋め尽くす彼女が愛した小説やら詩集。

その横で妻はベルトで身体をベッドに固定し、読書をしていた。

集中できていなかった。何度も何度も同じページを読んでは戻り、読んでは戻りを繰り返した。妻の眉間に寄った眉。内容を吟味と言うよりも、どうも頭に入っていないみたいだ。

「あぁ……グレイス！　餌だって封を開けてきたけレど、あのリョォじゃ三日も持たないし、水だって……水だって……便器のを飲むしか…」

妻は読書をしながら、グレイスの事ばかりを心配した。

僕は妻の嘆いてばかりの声に押し出されるように、一人でまたコックピットのある一階に無重力空間を泳いで戻った。

何か脱出の手がかりがあるかもしれない。何か見つけな

ければ。
一階に戻ると、コックピット前面の壁が透明なガラス壁となっていた。宇宙空間と機内の自分達を分けるのは、分厚い透明なガラス板だけとなったことで、二人のグワッチ人（僕は宇宙人達をこう呼ぶ事に決めたんだ）の向こうに、宇宙の景観が視界一杯に広がっていた。
四方無限の漆黒の真空。
遥か彼方で輝く星々。
四方へ伸びて散り散り重なり合う光条……
「何て景色なんだ…」
僕は嘆息し、得体の知れないグワッチ人達がコックピットに居座るのも知らぬように、彼等の後ろに立ち、身体一杯で広大深淵の宇宙を受け止め、星々の輝きに心奪われた。グワッチ人達は宇宙船の操縦に必死で僕の存在には気づいていない。僕は声を漏らすまい、と思っていた訳だが……心の中で深い感動が生まれるのに耐え切れなかった。
「そうだ、僕はその昔、一天文学生だった……」
「ゲーッチ・グールッヒ・ガチャガチャ！」
宇宙人が僕に四つの水晶体の眼を向けて、騒ぎ出した。つい、宇宙の美しさに声が漏れてしまった。無重力空間のせいで気配も無く忍び寄る人間に、驚いたのだろう。
「ガッチャリ・ガチャリ」
「ガッチャリ・ガチャリ」
宇宙人の一人が六本腕の六本指の一指で、緑に光る正方形のボタンを押すと、ガラス壁に映る宇宙の景色が変わった。
白黒の宇宙が鮮やかな七色で映し出された。
虹色の星雲。
星々は青白く輝き、赤く燃え、紫白（しはく）に染まる。
鮮やかな藻のような巨大の星雲……星々に被さり、
拡がる炎……紅の星雲……
九月の秋のような黄色に溶けて、
広大で暗い宇宙を染めている。
星雲の合間には、
漆黒の宇宙が身体となり、
輝く星が目となる蛇が星雲を泳いでいる。
そんな宇宙の姿を見ると、僕は声を漏らさずにはいられない。
既に地球は後方彼方にあるようだった。
僕達は小惑星帯に突入していた。コックピットに立つグワッチ人も、四本の腕を操縦に使って真剣そのものだ。宇宙船の飛ぶスピードが余りにも早いために、彼等も休んでる暇がない。
細かな隕石はガンガンと音を立てて宇宙船に衝突させ、

大きな隕石は巧みに避けていく。コックピット前面に暫く立っていると、飽き性の僕は宇宙の景色にも見飽きてしまった。
どれ程、この漆黒の宇宙を……虹色の星雲を……星達の瞬きを眺めていたか。
宇宙は独りで見るには広すぎて寂しいものだ。
僕はまた妻が居る三階の居住スペースに無重力を泳いで戻った。
妻の姿はというと、まず綺麗な半月のようなうなじの上があり、黄金の太陽のように括られた髪があった。
セミダブル程のベッドに腰かけ、無重力で浮かないようにベルトで身体を固定したまま、ただ一心に本を読んでいた。僕が惚れた彼女の姿だ。
乾いた魂が映る青い両目。必死にページを読み進め、細く真っ直ぐな指が優雅にページに添えられている。紙が擦（こす）れる音が嫌いと言って、ページを捲（めく）らず、ページを弾くように指を使う。その妻の姿に僕は惚れたのだ。
「あラ、どうしたのよ」
妻は僕の姿を認めて言った。
「もう少し、宇宙の景色を眺めテルと思ったのに」
どういう訳か、妻は僕がコックピットで宇宙を眺めていた事に気づいていた。グワッチ人達の会話が漏れ聞こえたのかもしれない。
「飽きちゃったんだよ」と僕は答えた。
「とっても壮大で綺麗だったんだけどさ、宇宙が大きすぎて、同じ景色がずっと続いてた。次は二人で見に行こう」
「嫌よ」
「そんな事は言わずにさ、今、何時か分かる？　少し眠たいんだ」
妻は枕元に置いてあった置時計を手に取って、時刻を見た。その置時計は我が家から妻と消えた物の一つだ。
「日本時間で深夜の二時三十分ね。眠たいのも無理ないわよ、アナタは元々朝型の人なんだから」
そう言った時、宇宙船全体に警戒音が鳴った。
ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！
鳴り響く騒がしい警戒音。僕は焦燥し不安になって妻に尋ねる。妻はようやく本のページから視線を上げて、警戒音の在処（ありか）を突き止めるために宇宙船内部を見上げる。
ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！ビー！
「グールッヒ・ゲルグル・ガチャガチャ！」
一階から、宇宙人の叫び声が無重力空間に聞こえる。
「ガッチャ・ゲール・ガッチャ・グワッチ・ガチャガチャ！」

宇宙人が矢継ぎ早に何かを叫び、妻が翻訳してくれる。
「あなたに降りてこいと言ってるわ。地球からのスパイなんじゃないかって疑ってイルみたい」
「この僕がか？」
「きっと地球の人達がこの宇宙船を探知して、電磁波を当てたのよ。宇宙だと電磁波を当てラレルと、次はレーザーが飛んでくルカら。何かに捕まって！　無重力でも遠心リョクで飛ばされルワ！」
宇宙船は縦に横に揺れ動いた。妻はベッドに身体を固定しているから、そのまま本を読み進めようとしたが、余りにも揺れるので、
「もう、こんなので本なんて読んだラ、直ぐに酔っちゃうわ！」
と言って、読んでいた本を無重力空間にポッと浮かした。そこで僕は初めて彼女が読んでいたのは、彼女のお気に入りの詩集だと気が付いた。
古今東西の詩を網羅しようと試みる何処かの誰かの野心作で、麦の穂が風吹く大地に揺れる絵が表紙に描かれている詩集だ。
慣性の法則と遠心力に振り回され、僕は何度も宇宙船のごちゃごちゃとした壁に激突した。堪らなくなって、妻に抱きついた。
「ちょっと！　何すルのよ」
「君は固定されてるからいいじゃないか！」
「掴まルナら、他の何かに掴まレばいいでしょうに！」
「どうだい！　地球には帰りたくなったかい？」
「馬っ鹿じゃない！」
抱きついてようやく妻の身体を思い出した。抱き心地、景色、匂い……他愛のない会話をしながら僕は泣きそうになった。
でも涙は直ぐに引っ込んだ。三階の床穴からグワッチ人の一人が触覚を出し、水晶体の四ツ目を出して、六本の腕を持つ細い身体をようやく姿を現したからだ。
「グワッチ・ゲッチャゲチャ・グールッヒ・ガチャガチャ！」
随分と興奮しているようで、四ツ目で僕を見つめている。
「お前は地球かラの回し者なのか！　だって」
「どうか違うって伝えてくれ！　殺されちまう！」
「仕方ないわネ」
僕が妻に懇願すると、彼女は青い目をニヤリとさせて、
「グッチャガッチャ・グワッチ」
そう落ちついた口調で答えてくれた。続けて何かを言う。
「ガッチャ・ゲーリッヒ・ボルカ・ガチャガチャ」
「ゲッチャリ・ゲリッヒ・グワッチ・ガチャガチャ！」
「やっぱリ、フフッ、だっタラ、お前を地球へ突っ返してやルって」
妻は笑いながら、僕に教えてくれる。

「やっぱりって君はコイツになんて伝えたんだ？」
「ふふっ、内緒」
「また嘘をついたな！」
三階に姿を現したグワッチ人が床を蹴って、無重力空間の中で僕に飛び掛かる。僕は直ぐに捕まって、両手両足をグワッチ人一人に絡めとられる。グワッチ人は地球人よりも力強く、腕が二本多い。
僕は妻を罵（ののし）った。
「この嘘つき女！　僕は奴らに真実を伝えてくれと言ったはずだろ。コイツ等！　僕を殺す気だ！」
「フフフッ」と妻は美しく笑うばかりだった。
その内、縦や横に揺れ動く宇宙船の動きが緩やかになり、グワッチ人は僕を捕まえたまま、またコックピットへと泳いだ。
コックピットのガラス壁の広がっていた景色……
……それはあらゆる残骸が浮遊する宇宙のゴミ捨て場だった。
千切れた廃材に破損した衛星。巨大な望遠鏡のような筒も宇宙に浮いていた。二体の干からびた人間らしき死骸も手を繋いだまま浮遊していた。グワッチ人達の家庭ゴミ・産業ゴミだろうか、細々とした衣服や金属網なんかも浮いていて、漆黒の宇宙空間にゴミが作り出すカラフルなモザイク模様があった。宇宙船はゴミの中を漂っていた。
「グワッチ・ガチャッリ・ガッチャン・ガチャガチャ」
後ろを付いて来た妻がグワッチ人にグワッチ語で何かを尋ね、彼等の答えを翻訳してくれる。
自分達はグワッチ語で言う『ゴミ捨て星雲』の中にいて、僕の思った通り、宇宙の協定で決められたゴミ捨て場を慎重に浮遊している最中らしい。廃材やゴミは多岐に及び、彼等はその中から、使い古され捨てられた、隕石から作る簡易的な宇宙船を探しているようだ。
グワッチ人はそれを『隕石の卵船』と呼ぶらしい。グワッチ人にとって、この宇宙は浮かぶ空間ではなく、泳ぐ空間であり、妻によるとグワッチ人は卵から孵化するらしい。
「まさかコイツら、僕達を地球に返してくれるのか？」
「アナタだけね」
「駄目だ！　瑠奈も一緒に帰るんだ！　離婚は認めないぞ」
僕がそう言った時、妻の青眼に涙が……真実が浮かんだのが見えた。霜のように薄い涙だったが、地球の空が澄んでいるように、彼女の青眼もまた淡く輝いていた。
宇宙船の左右のアームが前方の小隕石を慎重に掴んだ。コックピット前面のガラス壁正面にロボットアームで運ばれた小隕石。大きさは直径十メートル程、球形に近い小隕石だったが、金属製の重そうな扉が一つだけ付けられているのが分かる。遥か昔に乗り捨てられた卵船だった。

「グーリッヒ！」
「グーリッヒ！」
グワッチ人達の号令一下、宇宙を彷徨い続けた卵船は宇宙船にドッキングされた。
地震のような大きな衝撃が宇宙船に響いて横揺れした。
「ここが宇宙の協定でゴミ捨て場に指定されていルノは、いずレ近く……何百万年経つと、ここに新たな星が生まレル事が分かっているかラなの」
妻が僕に後ろから、囁くように教えてくれた。
「星が出キル時、この星雲も宇宙のゴミも全て巻き込んで、重力が星のツチへと固めてくれる。そレが彼ラには分かってイルのよ。宇宙人達は……の惑星に住む宇宙人達にも……」
「ゲルグル・ガチャン・グワッチ・ガチャガチャ！」
僕を担いだグワッチ人が動き出した。
無重力空間の中で軽々と、僕の抵抗も虚しく、僕は宇宙船の入り口にまで連れて来られた。
「嫌だ！　独りで地球に帰りたくないぞ！　離せ！」
まず小さな風がドッキングされた卵船の方向へ吹き、強風が卵船内部へ吹きつけた。宇宙船の空気が真空だった卵船に流れ込んだ。
僕が地球へ送り帰される前、グワッチ人がこう叫んだ。
「グーリッヒ！」

「グーリッヒ！」

七　信じてくれた

「――アナタの言うグワッチ人達はね、故郷の惑星で生きる私達の事をこう呼ぶわ。嘘の人々、それに対してグワッチ人は真実の人――」
妻が宇宙船の中で僕にそう言った。グワッチ人達にとっては、僕達人類は『嘘をつき、嘘を信じる人々』なのだ。
「グワッチ人にとって――」と僕は妻に尋ねた。
「――愛も嘘なのかい？」
「嘘よ」
「――希望も絶望も？」
「嘘」
「――小説も詩も絵も？」
「全部嘘。だから世界は退屈よ」
確かに……僕が経験してきた愛や希望に絶望、それら抽象的な観念は現実世界において存在しない嘘だ。僕の妻が愛した詩や小説なんかの文学や絵画、殆どの芸術も嘘の世界に息づく命だ。
妻が言うには、グワッチ人が住む惑星には古来、ハビダブルゾーン、つまり生命に適した環境が千年にも満たない、とても短い期間だけ存在した。グワッチ人はそのような期

限付きの生命環境の中で生まれ、宇宙の真実について研究に明け暮れ、今では生命環境を自分達の意思で造る事、テラフォーミングに成功したのだと言う。
研究成果の一つとして、宇宙の重力の方向を定めるダークマターの発見があり、彼等はその力を用いて重力を操り、宇宙空間を往来している。これも全て宇宙船で妻が教えてくれたことだった。恐らくは真実だと思う。
妻が嘘を愛するきっかけになった詩がある。
それはグワッチ星に伝わる宇宙人類の詩で、真実を善とするグワッチ人に対するアンチテーゼとして、宇宙人類の魂を表す民族詩として謡われて続けた。

事実現実、大自然。
本質はなく実存がある。
言葉は記号が造る嘘。
自己は感情。
感情こそ命。
静かな星に命はなく、
言葉もない。
あぁ、嘘を愛せよ信じよ、嘘の民。
白光の星々を色塗るのは、
命の彩り、嘘において他はない。

妻は宇宙船で太古の宇宙人類が詠んだこの詩を、僕に諳（そら）んじてくれた。僕はその詩を何度も何度も諳んじ、思い返しながら、窓もない隕石の卵船に乗って地球へと戻っていた。僕が乗った卵船は重力の方向に導かれるまま、地球の大気圏に突入し、流れ星から隕石となり、地球に辿り着いた。落下の衝撃で僕は瀕死の重体だったが、奇跡的に一命を取り留めて、今は病院のベッドに暫く長い間横たわっている。
身体は指先の隅々までまだ痛むし、退院予定はまだまだ先だ。妻のいない毎日を、どうやって生きればいいのか。
愛すべき人はもう地球にはいない。これが現実であり真実だ。でも僕は物言わぬ現実を生きて行かねばいかない。自他に沢山の嘘をつきながら。希望の嘘をつきながら。
桜色の若い看護婦が僕に言った。
「星出さん、面会ですよ」
現れたのは、中谷教授だった。
「やぁ」
「あぁ、昨日ぶりですね。グレイスは元気にしてますか？」
「元気いっぱいに眠ってばかりいるよ、あの猫は」
「それは良かった」
「……君の性格からして、宇宙船にしがみついてでも瑠奈を引っ張って来る、と期待もしたんだけどね、よっこらせと」
中谷教授はベッドの傍にあった椅子に腰かけた。
「隕石から瀕死の重体で現れた君が一命を取り留めたニュー

スはさ、今や地球規模の関心事だ。テレビ見てるか？　星出君が初めて面会する相手に私を選んでくれたことに感謝、感謝だ」

「教授に第二の中谷論文を書かせてあげようと思いましてね」

「フッ、世間もそのつもりだ。でもそのつもりはないんだよ。残念」

「へぇ、そりゃどうしてです？」

「娘の跡を根掘り葉掘り詮索されるのは御免だ。腐っても私は瑠奈の父だ。あの娘もそう信じてくれた」

「信じてくれた？」

「私があの娘を保護した時、父になるには、つまり、血を分かつ必要はない、と嘘をついたんだ」

「それは決して嘘じゃない」

「いや、私が彼女の父というのは嘘だった。瑠奈は共に地球に堕ちて、焼け死んだ父親をずっと想っていたから。でもあの娘は私を父と信じてくれた……信じてくれたよ」

嘘を信じ、嘘を愛する魂。妻ほど嘘を愛した人はいない。

「とにかく私はもう中谷論文は書かない。私は一度決めたことは覆さない。今度は星出君が『星出論文』を書くんだ！　星出君は今、世界のどの天文学者よりも宇宙の姿をよく知っているんだから！　ただ一つだけお願いがある。瑠奈の事は決して書かないでくれ」

「瑠奈抜きじゃ、僕はどうやって宇宙船に乗った説明をすればいいんです？」

「それを考えるために星出君に会いに来たんだ」

それから暫くの間、僕と中谷教授は考えられるだけの宇宙人遭遇のシナリオを出し合った。中谷教授は真実を隠すための嘘をまた重ねるつもりだったし、僕も世間に嘘をつこうと決めた。でもいつの間にやら話が逸れて、また妻について話した。僕達は二人して妻の事が好きだった。妻の話が途切れようもない。

思い出すのは妻がついた幾つもの嘘。

でも僕は決して彼女を責めたりなどしない。グワッチ人が考える通り、僕達地球人類は元より良いも悪いも、嘘に塗り固められた日々を送っているのだから。

「嘘が素晴らしいのは分かったさ――」

僕は宇宙船で妻に言った言葉を思い出す。

「――でも真実は何処にある？」

妻は答えた。

「――真実はいつも、嘘の何処かに」

妻は嘘を愛する人だった。妻は美しい人だった。

妻が嘘を愛していた想いを端的に表す一篇の詩がある。彼女自身のお気に入りで、宇宙船の中で読んでいたあの麦の穂の詩集に収められた一篇だ。

たった二行の英詩。その詩にはこう書いてある。

文芸思潮新人賞　優秀賞　受賞の言葉　小幡洸貴

このたびは新人賞優秀賞を受賞させて頂きありがとうございます。筆歴もなく、自分の小説を書いて応募しては、落選する日々を過ごしておりましたので、文芸思潮新人賞の三次選考通過、そしてこの度の受賞に大変感激しております。小説を書き続ける意欲となり、一生忘れられない受賞となりました。

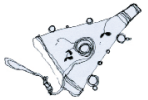
今回応募させて頂いた「ホワイト・ライ」は「嘘」に焦点を当てた短編小説です。「言葉」を操る私達人類を表すのに「嘘」ほど良い象徴はないのではないか、そう思って書き始めたのがこの短編小説です。

読んで頂き、少しでも面白い事を考えるな、と思ってもらえれば、書いた自分にとってそれ以上の喜びはありません。

小幡洸貴――――――――
おばた　ひろき
1996年富山県生まれ
高岡市商業高等学校後、
オーストラリアに留学
英語学校、映像専門学校を経て、ウーロンゴン大学のCreative Writing科目を専攻
3年間の文学教育を経て、富山県に帰郷
小売業に勤めながら、小説を書いている

F was a hook, originally.
Life is a hook in lies.

Fはフックだった、元々。
人生は嘘の中のフック。



タイの素顔がここにある
特価1800円　アジア文化社へ